第Ⅵ章　総括

第１節　市納上第２遺跡の評価

今回調査で得られた成果を検討し、時期毎に遺跡の様相をまとめる。

１　旧石器時代

Ⅵ層～Ⅴ層から検出された遺構・遺物の大半は旧石器時代の所産である。堆積状況が安定し、且つ上層の影響が少ないⅥ層出土の石器群をⅠ期とした。Ⅴ層からはナイフ形石器文化期の遺物と細石刃文化期の遺物が出土したが、明瞭なナイフ形石器文化期の遺物をⅡ期、細石刃文化期の遺物をⅢ期とした。

【Ⅰ期】

Ⅵ層下部から掘り込みのある１号礫群（SI35）が検出された。AT 下位において礫が密集する礫群については、川南町後牟田遺跡や新富町永牟田第２遺跡でも検出されており、掘り込みを有するものは新富町永牟田第１遺跡でも検出されているが、調査された遺跡数を考慮すると類例は少ない。また、礫群中の炭化物の放射性炭素年代測定結果は 28340 ± 250 年 B.P. で暦年較正の範囲外であるが、AT 降灰直前の可能性がある。Ⅵ層出土のナイフ形石器の特徴もあわせると、宮崎 10 段階編年[註1] においては第２・３段階に位置づけられる。

【Ⅱ期】

礫群と認定できるまとまりをもつものは２号礫群（SI33）と３号礫群（SI34）の２基である。剥片尖頭器が確認調査において出土しているが１点のみの出土である。しかし流紋岩製の縦長剥片を素材とするスクレイパーが存在しており、関連性が窺える。石器組成においてナイフ形石器の数量が多いことが特徴といえるであろう。宮崎 10 段階編年においては第５・６段階に位置づけられる。

【Ⅲ期】

Ⅳ・Ⅴ層より細石刃文化期の遺物を抽出した。明確な細石刃核は少ない。細石刃の出土もみられるが数量は少なく、石器製作の痕跡は乏しい。

２　縄文時代

【早期】

集石遺構については、規模の大小や掘り込みの有無などの形態の差異はみられる。当該時期の遺物は少ないが、別府原式と呼ばれる貝殻条痕文土器や古相の押型文土器が遺物包含層や集石遺構内部から出土したことから縄文時代早期前葉の遺構と位置づけたい。別府原式土器が出土する遺跡は高い頻度で炉穴が伴うことが指摘されているが、今回の調査では炉穴は検出されなかった。今回調査した範囲外に分布している可能性を考慮する必要がある。

【前・中期】

本遺跡の当該時期の遺構は確認されなかったが、大平式と呼ばれる土器が一定量出土した。『宮崎県史』によると、串間市大平遺跡から全体の形状を把握できる資料が出土している。類例としては串間市下弓田遺跡、綾町尾立遺跡、宮崎市上の原第２遺跡、都城市岩立遺跡、鹿児島県横川町中尾田遺跡が挙げられる。分布域は宮崎県南部から鹿児島であり、同型式の土器の分布としては最北端であろう。

【後・晩期】

（１）土器について

当該時期の土器が出土した遺物包含層は堆積状況が不安定であるが、出土土器の総体を概観すれば、いくつかの特徴が挙げられる。すなわち、粗製深鉢の胴部片と底部が多いこと、底部は上底が多いこと、口縁部片が少ないことなどである。これら粗製深鉢の所属時期や型式が本遺跡の位置づけに欠かせないのであるが、このような土器は形態的特徴に乏しく、報告されない場合が多いため、比較すべき資料が少ない。従ってここでは、底部形態に焦点を当て、本遺跡出土の縄文時代後・晩期土器の特徴を考察する。

まず、底部の形態は平底と上底の２者がある。それぞれ胴部に向かって直線的に伸びるものと、外方に開くものがある。Ⅳ章第５節２ではそれぞ

註1　宮崎県旧石器談話会「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学 66』旧石器文化談話会　2005

れA類、B類とし、平底A類・平底B類、上底A類・上底B類に分けられる。量的には上底B類が最も多く、続いて平底B類、平底A類、上底A類となる。

次に底部の断面観察の結果から、底部の成形に関して考察する。どの類型にも共通していえることとは、粘土の接合痕を観察すると底部断面が2層に分かれるものが多いことである。中には成形時に粘土の接着が不十分であったためか、空隙を生じるものもある。粘土円盤を1枚ではなく2枚重ねるわりには底部がそこまで厚くなるわけでもない。また、B類の胴部は外方に向かって開く様に伸びるため、結果的に底部が張り出す傾向にある。張り出した部分の断面を観察すると、粘土を付け足して高台状にするものや、底部をつまみ出して高台状にするものが見受けられる。そして両者の殆どが、底部と胴部の境にある屈曲部分に粘土を付け足して補強を行っている。

器面調整の観点では、平底と上底の両者ともに底部底面に貝殻条痕の後ナデ調整を行うものが多い。すなわち、胴部をある程度、または口縁部まで成形・乾燥させた後、土器を倒置、乃至(ないし)は傾けて底面の調整を行っていたのであろう。底部と接合はしていないが、粗製深鉢の胴部上半に擬口縁の様相が認められるものは、その段階で一定時間乾燥させたと考えられるため、この段階で底面の調整を行った可能性も想定したい。

本遺跡の縄文時代後・晩期の粗製深鉢底部の観察から、以下の特徴が挙げられる。

①底部形態では上底が卓越し、且つ高台状に張り出すものが多い。

②底部断面が2層になるものが多い。

③底部～胴部の屈曲部に粘土を補強する。

④成形途中若しくは成形後一定期間乾燥させた後、底面の調整を行った可能性がある。

縄文時代後・晩期の無文粗製土器は報告されない傾向があり、本遺跡のように粗製の土器が主体的にある場合（底部から推せば約100個体）、時期や位置づけが困難になる。文様のみならず、器形・成形技法・調整など文様以外の要素も検討し、偏りなく土器を検討する必要があろう。

(2) 石錘について

近年、宮崎県域の錘具の変遷についての論考があり、縄文時代早期での錘具の登場と短軸打欠石錘の卓越、縄文時代前期～中期での切目石錘・土器片錘の伝播、縄文時代後期～晩期における錘具の大量出土、弥生時代遺構での打欠石錘の減少と新たな錘具の登場という、4つの画期を指摘している（藤木 2003）。

当遺跡の石錘は総数130点が出土し、内訳は打欠石錘96点、有溝石錘30点、切目石錘4点であり、土器片錘は出土していない。小河川を挟んだ反対側に位置する市納上第4遺跡においては打欠石錘185点が出土していることを考慮すると調査面積に対して石錘の出土数量は少ないと評価できる。しかし、当遺跡においての特徴は有溝石錘の数量が30点出土し、その割合が高いことである。当遺跡のⅢ層は縄文時代後期～弥生時代にかけての複数時期の土器が出土しているが打欠石錘と有溝石錘の分布には大きな違いがみられず、時期差を検討するには至らなかった。有溝石錘は球状のものと楕円状のものがあり、十字状の溝を有するものも存在する。有溝石錘の中でも用途や漁網に使用すると仮定した場合の装着部位が違う可能性がある。

また、打欠石錘の中には両端を打ち欠いた後、打点部分を敲打により潰したものもみられ、両端を敲打のみにより抉り部分を形成するものもみられる。紐・縄等の装着を意識した際の細部調整と思われる。

当遺跡は小河川に面しており、さらに平田川が南に約500 m、名貫川が北に約3㎞離れた所を流れている。また、現在、当遺跡周辺にはダムも存在し、周辺住民への聞き取り調査ではダム建設前は溜め池であったとのことであった。当遺跡の石錘についても河川だけではなく池でも使用された可能性を考慮すべきであろうが、有溝石錘の出土量が多いのに対し、土器片錘が出土しないことからある程度の流れのある礫の多い河川での使用を目的とし、流速にあわせて大きさ・形態の違う石錘を利用していた可能性が高い。

3　弥生時代以降

中世以降の遺構・遺物は炭焼跡としたSC2・3や溝状遺構としたSD1・SD2は時期を示す遺物がなく、SD1・2については調査前に存在した公衆用道路と重複し、いずれも表土直下から検出されたことから整理作業半ばまで近・現代の遺構であろうという認識であった。SC3より多数検出された炭化物の中から良好に残存していたものを選び、自然科学分析を行ったところ中世の可能性が高い年代が得られたためその認識を改めた。溝状遺構SD 2を切っている溝状遺構SD1の埋土も炭焼跡の埋土と土色・土質が類似している埋土がみられたことから近い時期のものである可能性がある。なお、当遺跡の北部に近接する市納上第1遺跡においては、中世の溝状遺構が検出されており、埋土中からヘラ切りの土師器や青磁が出土していることから、本遺跡一帯に中世の遺構・遺物は希薄ながらも分布しているようである。

炭焼跡の類例は宮崎県内においては希であり、当遺跡の炭焼跡と類似する遺構は児湯郡高鍋町の野首第1遺跡において検出されている他、確認されていない。また、他県の例であり、年代測定の結果210±B.P.という年代が得られ、江戸時代後期に比定されているが、広島県西カガラ遺跡においては、炭窯跡という名称を用いた炭焼を示す遺構が数基検出されおり、排水施設を伴う可能性があるものも確認されている。また、「少なくとも昭和30年代までは地面を浅く掘りくぼめて雑木を置き、火をつけてある程度火がまわった段階で土をかけて蒸し焼きにし、できた炭を家庭で利用することは農村部でかなり一般的であったようである。」と述べられおり、宮崎県においても同様の利用状況を想定すべきであろう。時期比定において困難な面は多く、慎重にならざる点は多いが今後、類例の増加を待ち、検討されることを期待したい。

第2節　尾鈴山酸性岩類の利用について

1　宮崎県内の様相

尾鈴山酸性岩類については磨石が広域に流通することが知られており、石材選択についても考察されている（宍戸1994）。また、新富町・川南町・都農町の遺跡で検出される礫群や集石遺構にも利用されている石材であり、主岩体に近づくにつれ尾鈴山酸性岩類の割合が高くなる傾向が窺える。

近年、剥片石器への利用が顕著にみられ、すでに藤木聡氏により高鍋町唐木戸第4遺跡の出土例から石器製作についての考察が行われており、以下のような指摘があった。

①主に礫面を打面とし、作業面調整を行わない。
②礫面が赤化している資料の存在から、剥離に先行した加熱処理の可能性がある。
③大振りであり、簡単な刃器を生産した。

宮崎県内における尾鈴山酸性岩類の剥片石器への主な利用例を挙げ、新富町永牟田第2遺跡における礫器を最古の例とし、当遺跡より小川を挟んだ対岸に立地する市納上第4遺跡については推定原産地遺跡あるいはそれに準じる遺跡と評価している[註2]。また、市納上第4遺跡においては礫器への利用が指摘されており、採取された土器から縄文時代後期初頭に位置づけているが、当遺跡における時代別の石材利用の割合から検討しても市納上第4遺跡の尾鈴山酸性岩類の剥片も縄文時代後期のものである可能性が高い。

また、表31に尾鈴山酸性岩類の剥片石器出土を確認した遺跡をまとめた。特筆すべき点は①小丸川流域に近い児湯郡高鍋町においても多数の遺跡で出土が確認されている点、②宮崎郡清武町の縄文時代早期の遺跡においても出土がみられ、打製石斧・スクレイパーといった器種にも利用されており、石核・剥片の出土もみられる点である。

①については、現在でも小丸川にて尾鈴山酸性

註2　宮崎県埋蔵文化財センター「唐木戸第4遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第126集 2006

表 31　宮崎県における尾鈴山酸性岩類製剥片石器出土遺跡

遺跡名	所在地	時期	器種（点数）	備考
藏座村	児湯郡川南町大字川南	縄文時代早期	二次加工剥片 (2)	
市納上第４・５	児湯郡川南町大字川南	縄文時代後・晩期	礫器 (4)・剥片 42.4kg	表土中からの出土ではあるが、剥片が大量に出土しているため原産地遺跡の可能性が高い。
赤石・天神本	児湯郡川南町大字川南	縄文時代後期～弥生	石斧 (1)・剥片 (3)	
天神本第２	児湯郡川南町大字川南	縄文時代早期	剥片 (4)	細かなものが多く製品の出土はない。
上新開	児湯郡新富町大字新田	客土	スクレイパー (1)	正面に礫面を残す
唐木戸第４	児湯郡高鍋町大字上江	縄文時代晩期	接合資料 (11)・剥片 (26)	接合資料は折れ面同士の接合が主である
唐木戸第４	児湯郡高鍋町大字上江	旧石器時代 (AT 上)	剥片 (3)	剥片３点は接合する。
野首第１	児湯郡高鍋町大字上江	縄文時代早期～後期	スクレイパー (3) 剥片 (1)	
右葛ヶ迫	宮崎市大字折生ヶ迫	縄文時代前期～晩期	石斧 (2)・スクレイパー (2)・二次加工剥片 (1)・使用痕剥片 (3)	石斧の内、１点については磨石からの転用の可能性が指摘されている。
永牟田第２	児湯郡新富町大字新田	旧石器時代 (AT 下)	礫器 (1)	尾鈴山酸性岩類の剥片石器利用における最古例。
老瀬坂上第３	児湯郡高鍋町大字上江	縄文時代早期	スクレイパー (1)	
老瀬坂上第３	児湯郡高鍋町大字上江	縄文時代前期～晩期	石核、剥片	
椎屋形第１	宮崎市大字細江	縄文時代草創期	スクレイパー (1)	
山田第１	宮崎郡清武町大字船引	縄文時代早期	剥片 (1)	
坂元遺跡	宮崎郡清武町大字船引	縄文時代早期	剥片 (1)	
滑川第２	宮崎郡清武町大字船引	縄文時代早期	石斧 (1)	
上猪ノ原	宮崎郡清武町大字船引	縄文時代早期	スクレイパー・石核	

岩類の原礫を確認しており、宍戸氏の論考によると高鍋町付近の小丸川層や小丸川中・下流域でも採取可能であることから、周辺に原石を採取可能な地点があったため、一定量の利用がみられる地域であると思われる。

②については現在の清武川では尾鈴山酸性岩類の原礫を確認しておらず、主岩体からの距離も離れており、集石遺構に用いられる礫も砂岩を主体としている。よって、尾鈴山一帯の主岩体や小丸川流域などから搬入された可能性が高いと思われるが、当遺跡における縄文時代早期の尾鈴山酸性岩類の剥片石器の出土は縄文時代後期～弥生時代に比定されるものに比べて少なく、当遺跡より北に約 1.5㎞離れた藏座村遺跡においても縄文時代早期の集石遺構の主体は尾鈴山酸性岩類と思われる凝灰岩が主体であるのに対し、大形の剥片石器には砂岩・ホルンフェルスが主体的に利用され、尾鈴山酸性岩類のものは、二次加工剥片が２点みられるのみであり、剥片石器への積極的利用はみられない。宍戸氏の論考によると、砂岩と尾鈴山酸性岩類とでは酸性岩の方が堅くて吸水の少ない良質な石材であり、宮崎県南部を中心に良質な道具として流通したとの見解もあるため、軟質の砂岩が主体を占める県南部において、堅い石材が求められたための出土と思われる。

また、磨石・敲石の流通範囲と比較して剥片石器の分布を確認した遺跡の分布は現在のところ狭い。右葛ヶ迫遺跡の石斧のように磨石からの転用された例もみられるため、磨石・敲石の分布と重なる可能性も想定するべきであろう。また、当遺跡より北に位置する都農町朝草原遺跡、尾立第３遺跡、立野第２・第５遺跡の集石遺構・礫群に利用される礫の石材割合は当遺跡より尾鈴山酸性岩類が占める割合が高く、尾鈴山酸性岩類の石器も数多く出土している。縄文時代後期～弥生時代の遺物包含層が確認されていないため、剥片石器の点数は当遺跡と比較して少ないが、尾鈴山酸性岩類の主岩体の分布範囲に含まれる地域にであり、原産地遺跡と評価できる可能性のある遺跡であろう。今後も尾鈴山酸性岩類の主岩体の分布域において尾鈴山酸性岩類の原産地遺跡が見つかる可能性は高いと思われる。

2　市納上第２遺跡の様相

当遺跡においても尾鈴山酸性岩類の磨石・敲石の他、打欠石錘・有溝石錘の出土もみられたが、当遺跡では剥片石器への利用が顕著にみられ、石核・剥片が多数出土し、接合を行った結果、多数の接合資料が得られたことが最大の特徴である。

当遺跡のⅧ層は尾鈴山酸性岩類の礫層・岩盤であり、遺跡の周辺にも礫層・露頭が確認されている。石核や接合資料の礫面を観察すると風化しており、やや丸味をおびているものもみられるが、角礫もみられるため、遺跡周辺の礫層・露頭からの原石を採取を中心とし、一部、河原からの採取を行った原産地遺跡である可能性が高い。ＡＴ下位のⅥ層から礫器と刃部調整剥片の接合資料もみられ、Ⅴ層においては縦長剥片の出土もみられる。Ⅳ層からも礫器が出土しているが、もっとも出土量が多いのはⅢ層出土のものである。剥片は不定形で大形のものが多いが、まれに縦長状の剥片がみられる。また、接合の結果、折れ面同士の接合も多くみられるため、石器製作時において、イレギュラーによる折れも多かったと想定できる。礫器・スクレイパーなど製品の出土もみられたが、剥片の出土数を考慮すると製品の数は少ない。遺跡外への搬出等も考えられるが、大形の剥片が一定量みられるため、藤木氏の指摘するように大形の刃器として主に利用した可能性が高い。当遺跡においてはスクレイパー、礫器が出土しているが尾鈴山酸性岩類の石斧への利用はみられず、石斧に利用される石材はホルンフェルスが主体を占める。清武町上猪ノ原遺跡や、宮崎市右葛ヶ迫遺跡では磨石を転用した石斧の出土もみられるが、刃部を研磨したものはみられず、その石質から刃部を研磨することが困難であったため石斧には利用されなかったと位置づけておきたい。

第３節　市納上第１～第５遺跡の総括

当センターでこれまで調査した市納上第１～第５遺跡の調査成果を総合して当遺跡一帯の歴史的評価を行う。

まず、遺跡の名称であるが、第Ⅰ章でもふれたが、川南町の遺跡詳細分布調査、県教育委員会が行った遺跡分布調査、当センター調査の遺跡名はそれぞれ異なるため、以下に対応関係を示す。

当センター	県教育委員会	町教育委員会
市納上第１遺跡	市納上遺跡（いちなわかみ）	市納上遺跡（いちなわかみ）
市納上第２遺跡		
市納上第３遺跡	無	無
市納上第４遺跡	虚空蔵免遺跡（こくぞうめん）	幟立遺跡（のぼりたて）
市納上第５遺跡		

なお、町教育委員会の分布調査では幟立遺跡の東に虚空蔵免遺跡があり、県教育委員会の分布調査では、この２遺跡の範囲を合わせて虚空蔵免遺跡と呼称する。当センターの東九州自動車道関連発掘調査において虚空蔵免遺跡と呼ぶ遺跡は市納上第５遺跡の平田川を挟んで南側に存在する。同一名称で異なる場所を指しているおり、注意を要する。

地形的には市納上第１～第５遺跡は３つのまとまりに分けられる。市納上第１・第２遺跡（市納上遺跡）が北側の尾根上に、市納上第３遺跡は谷部に、市納上第４遺跡・第５遺跡（幟立遺跡）は南側の尾根に立地する。尾根に立地する市納上第１・２・４・５遺跡は斜面に立地するので鍵層となるテフラや遺物包含層の良好な堆積はなく、市納上第３遺跡では表土直下が礫層で遺物が数点出土したのみであった。

各時代毎に成果を挙げていく。

旧石器時代では、市納上第１遺跡・第２遺跡・第４遺跡で遺物が確認された。遺構が確認されたのは市納上第２遺跡である。市納上第２遺跡では礫群３基とナイフ形石器・細石刃・細石刃核が確認された。宮崎10段階編年で第３～５期に該当する。一方、市納上第１遺跡ではナイフ形石器などが少量、市納上第４遺跡では細石刃が１点出土したのみであり、当時の人間活動の拠点は市納上

第２遺跡であったといえる。

縄文時代では早期～晩期まで幅広い成果があった。遺構は確認されなかったが、大量の遺物が出土した。早期では市納上第２遺跡で集石遺構33基が検出され、刺突文、貝殻条痕文（別府原式）そして古相の押型文土器が出土した。市納上第1・第４遺跡でも押型文土器が数点出土しているが、いずれの遺跡も縄文時代早期前葉の遺物が出土しており、塞ノ神式は極少量にとどまる。人間活動の痕跡は早期前葉に限られ、また中心となるのは市納上第２遺跡であった。前期・中期の遺物量は少ないが、市納上第２遺跡で県南を中心に分布する大平式が出土した。後・晩期になると遺物量は増加し、市納上第４・第５遺跡に中心が移る。沈線文や貝殻腹縁刺突文を施す後期初頭～前葉の土器が大量に出土した。土器底部は平底で編物圧痕や木葉圧痕がつくものが目立った。対して市納上第２遺跡では粗製の深鉢や上底の底部が多く出土した。これらは概ね後・晩期の土器と言えよう。また、これらの土器に伴うと見られる石器も大量に出土した。特徴的な石器は石斧、石錘、尾鈴山酸性岩類の剥片である。石斧に関しては、市納上第２遺跡の石斧は扁平かつ小型のものが大半である。市納上第４・５遺跡では肉厚で大型のもの、中型で扁平なもの、小型のものと多様な石斧が出土した。石錘は打欠石錘・切目石錘・有溝石錘の各種が出土したが、打欠石錘が最も多い。ただし、市納上第２遺跡で有溝石錘の割合が高いことには注目したい。尾鈴山酸性岩類の剥片は特に出土量が多い。これまで磨石などに利用されていたことは知られていたが、大量の尾鈴山酸性岩類の剥片や礫器が出土したことは、当時周辺一帯が尾鈴山酸性岩類製石器の原産地あるいはそれに准じる遺跡だったと考えられる。なお、市納上第１遺跡では同時期の遺物の出土はない。

弥生時代～古墳時代にかけては市納上第２・第４・第５遺跡で少量の遺物が確認され、市納上第１遺跡では平面方形の竪穴住居跡１軒、周溝状遺構１基、そして弥生時代後期の土器が出土した。検出された遺構は削平を受け残存状況は良くなかったが、遺構内から弥生時代後期～終末期の土器が出土した。また、周溝状遺構からイネ・マメ類・アカネ科の炭化種子が検出され、これらの年代測定結果は暦年代（西暦）A.D.230～250年という値が出ており、竪穴住居跡出土の土器の時期とも符合する。

中世の成果は市納上第１遺跡で溝状遺構と青磁・土師器坏が検出された。市納上第２遺跡では炭焼跡と考えられる土坑が検出された他は遺物包含層から土師器皿が１点出土したのみであった。土坑から採取した炭化物は年代測定の結果、暦年代（西暦）A.D.1260年の値がでた。

以上時代毎に遺跡の変遷を追ったが、人間活動の中心は、旧石器時代～縄文時代中期は市納上第２遺跡、縄文時代後期前葉は市納上第4･5遺跡、縄文時代後期中葉～晩期は市納上第２遺跡、弥生時代以降は市納上第１遺跡へと移っているようである。しかし、遺物量から考えれば、最も活動が盛んだったのは縄文時代後・晩期であり、他の時期は低調であったと言える。ただし、該期の遺構は確認されず、遺物は二次的に形成された包含層からの出土であった。しかし、遺跡の西側高所には集落を営むのに適した平坦地が見られることから、集落域がこれまで調査した範囲外にある可能性は否定できない。

【引用参考文献】

宍戸章 1994「尾鈴山酸性岩類の磨石－交易と産地・石材選択に関する試論－」『宮崎考古』第12号　宮崎考古学会

馬籠亮道・長野眞一 2004「角錐状石器の製作技術について」『九州旧石器』第8号　九州旧石器文化研究会

宮田栄二 2006「剥片尖頭器の柄の装着痕と使用痕－宮崎県矢野原遺跡出土例から－」『宮崎考古』第20号　宮崎考古学会

松本茂 2003「東南部九州地域の細石刃石器群」『シンポジウム　日本の細石刃文化Ⅰ』八ヶ岳旧石器研究グループ

藤木聡 2003「宮崎県域の錘具の変遷と分布」『先史学・考古学論究Ⅳ』龍田考古会

新富町教育委員会 1992『新富町史　通史編』第1編自然　第2編原始

宮崎県埋蔵文化財センター 2003～2005「東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ」

広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室 2004「広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－がから地区の調査－」

宮崎県埋蔵文化財センター 2005「永牟田第1遺跡（二次・三次）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第114集

永友良典「宮崎県における旧石器時代研究の歩み－大野寅男と茂山護の仕事－」『九州旧石器』第9号

宮崎県埋蔵文化財センター 2006「永牟田第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第134集

宮崎県埋蔵文化財センター 2007「朝草原遺跡　尾立第3遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第147集

宮崎県埋蔵文化財センター 2001「藏座村遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』53集

川南町教育委員会 1983『川南町の埋蔵文化財遺跡詳細分布調査報告書』

川南町教育委員会 1983『川南町史』

後牟田遺跡調査団・川南町教育委員会 2002『後牟田遺跡　宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器時代の研究』

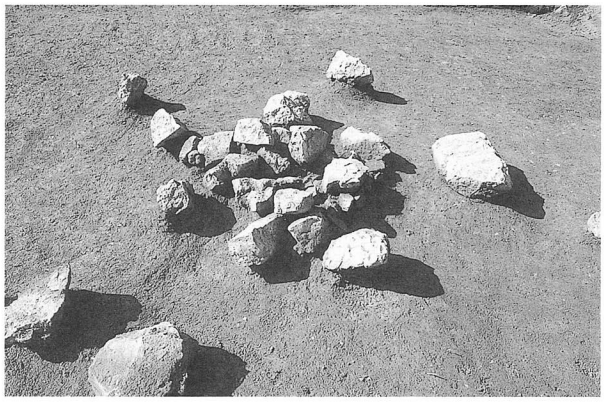
宮崎県埋蔵文化財センター 2006「市納上第1遺跡　市納上第4遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』121集

宮崎県埋蔵文化財センター 2006「虚空蔵免遺跡　赤石・天神本遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』122集

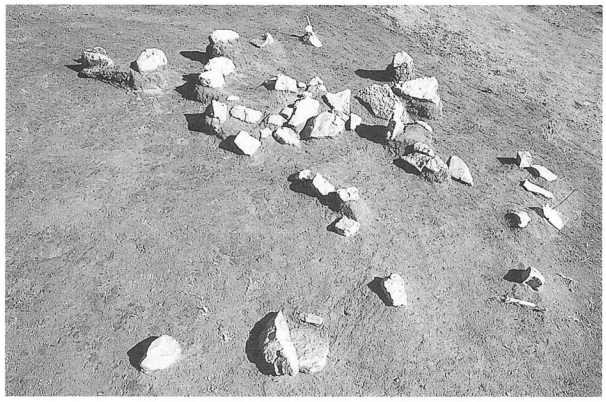
宮崎県埋蔵文化財センター 2006「天神本第2遺跡　大内原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』123集

巻末写真

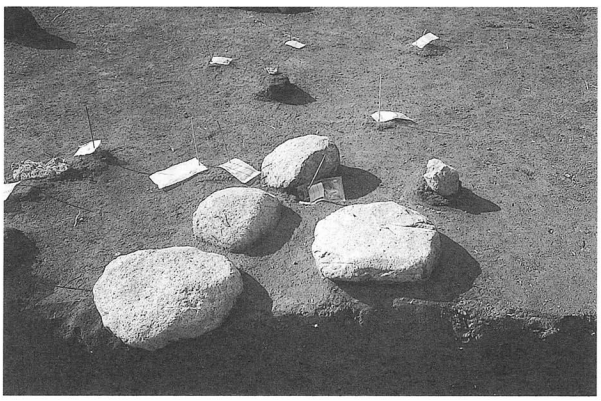
巻末写真 1



SI35



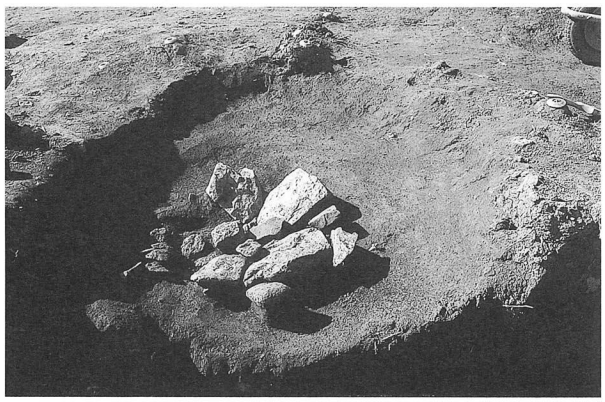
SI33



SI34

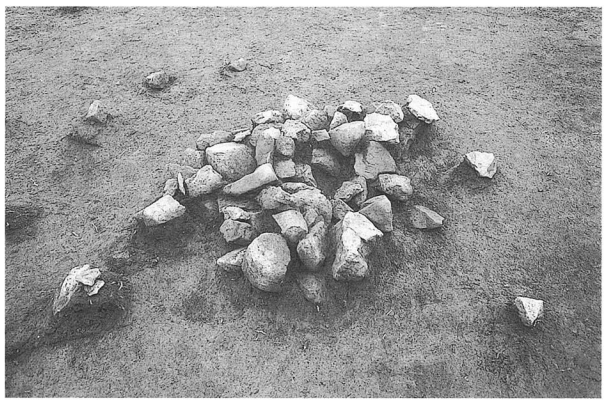
SI2

SI3

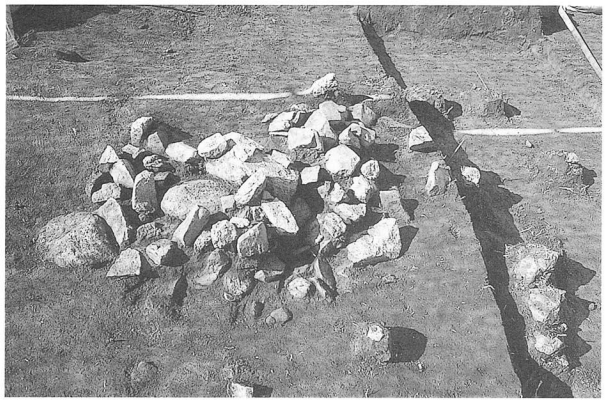


SI3 配石

SI4



SI5



SI6

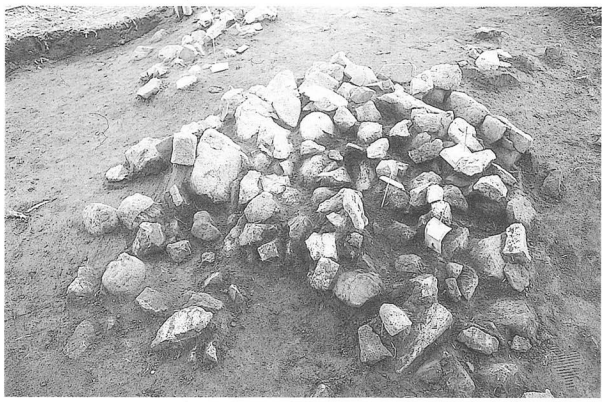
SI6 断面

SI7

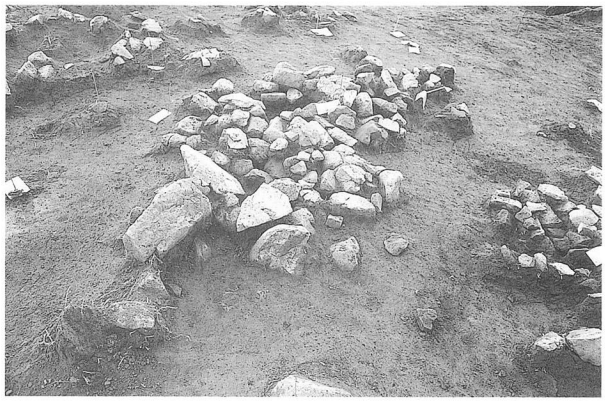
SI8

SI9

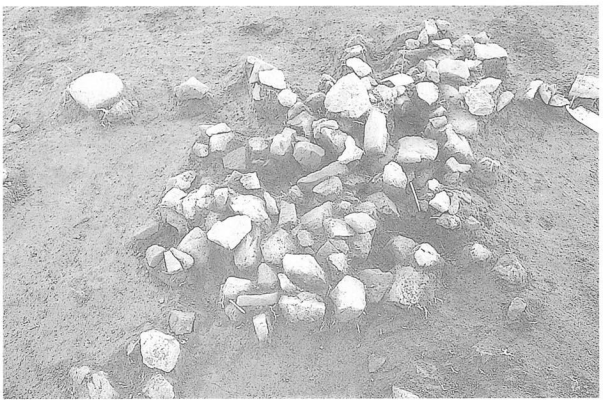
SI10



SI11

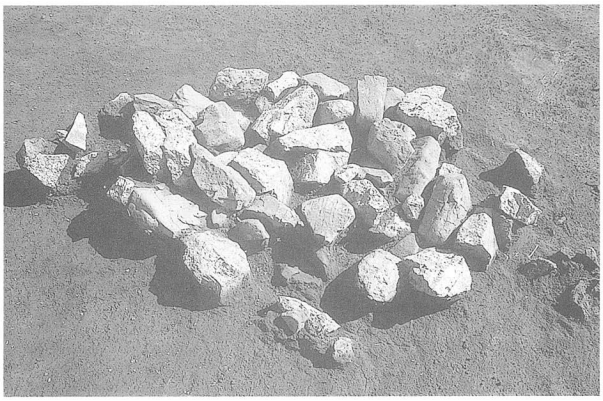


SI 12

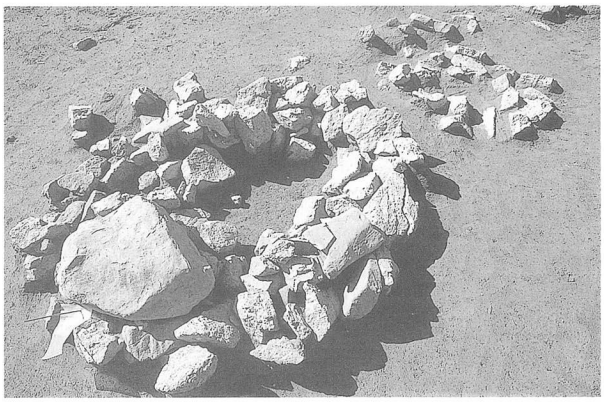


SI13

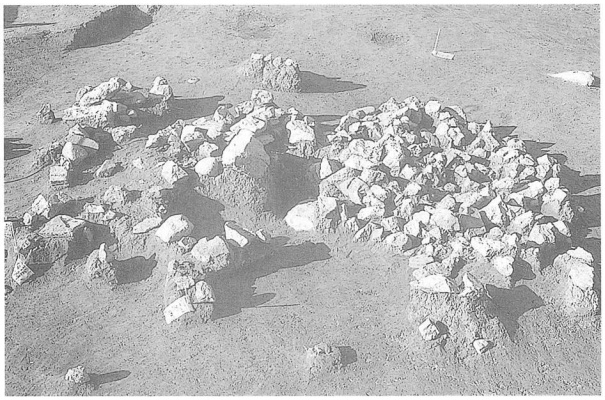
SI14



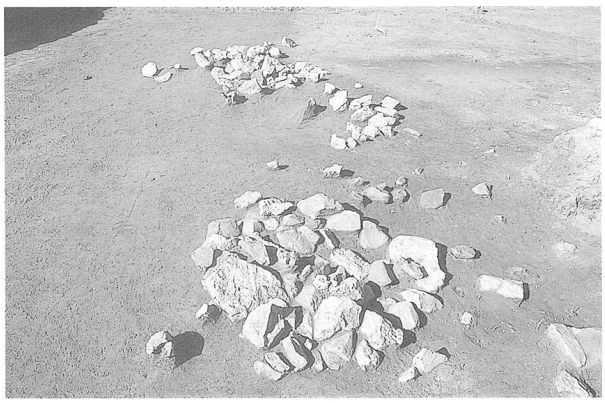
SI15



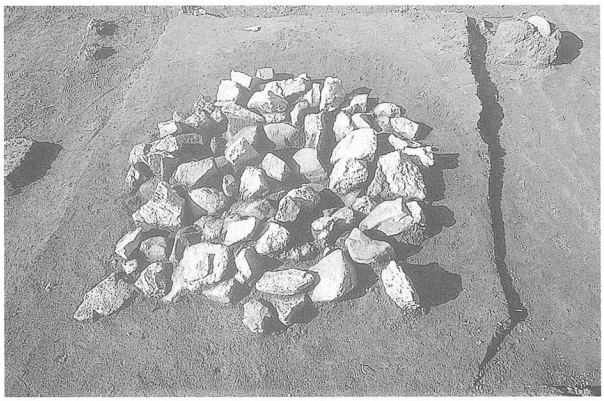
SI16



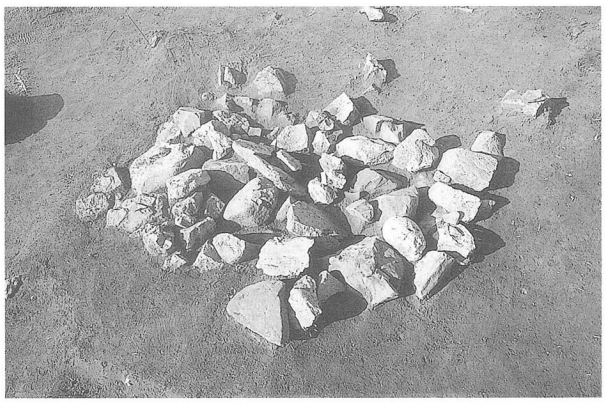
SI17



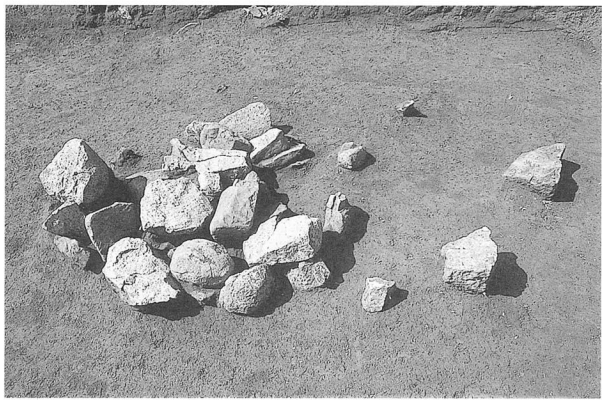
SI18・19



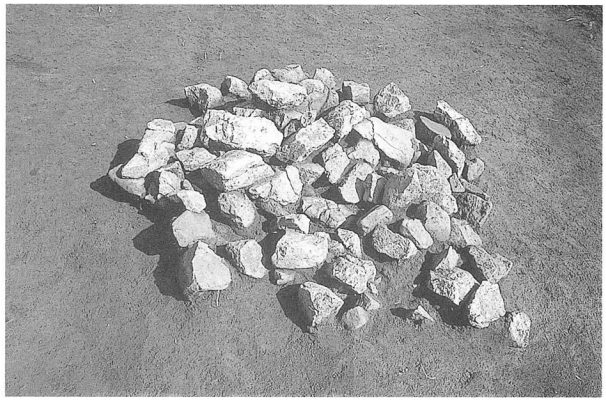
SI20



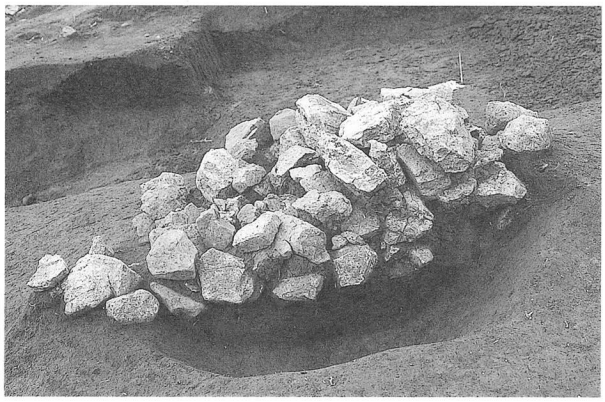
SI21



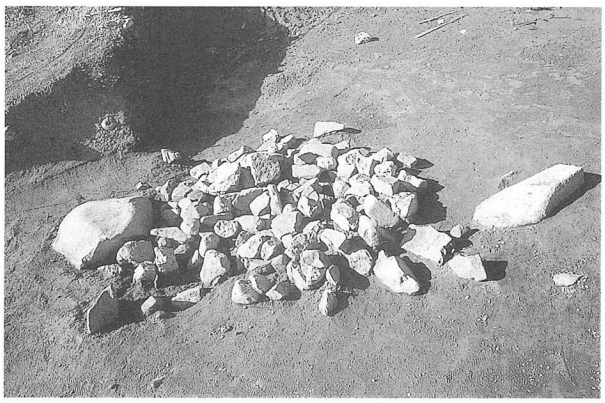
SI22



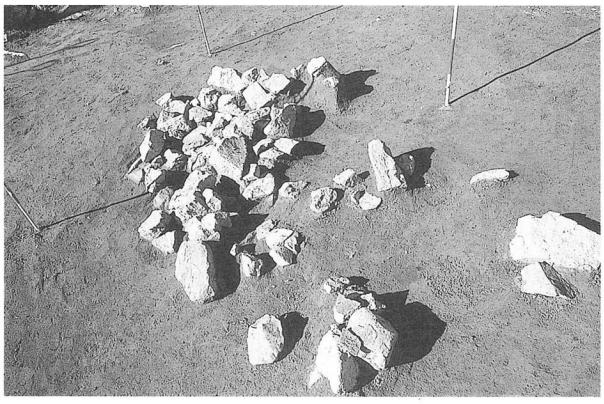
SI23



SI23 断面

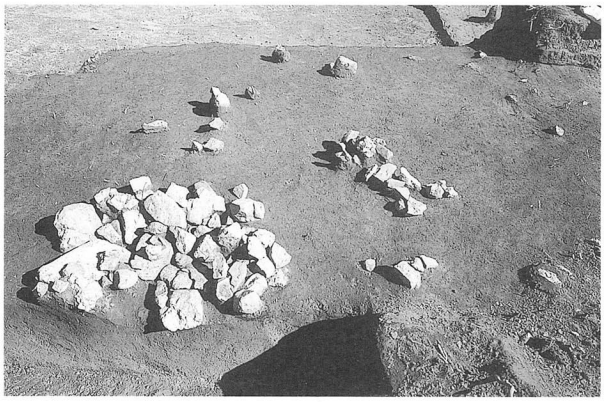


SI24

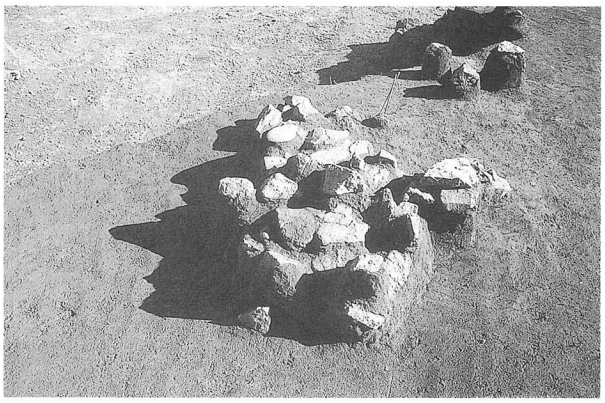


SI27

SI28



SI29



SI30

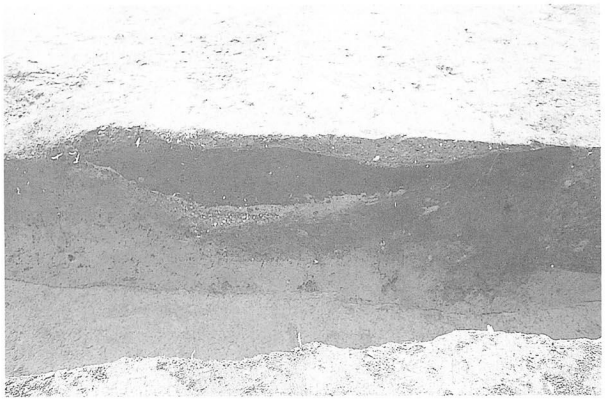
SI31

SI32

SD1・2 検出状況

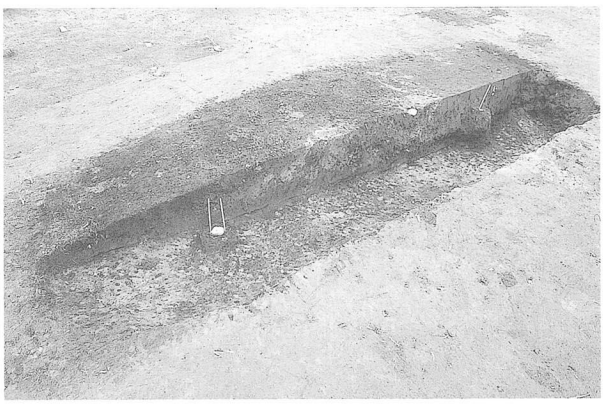
SD1 完掘

SD1・2 断面



SD1 断面

SD2 断面



SC2

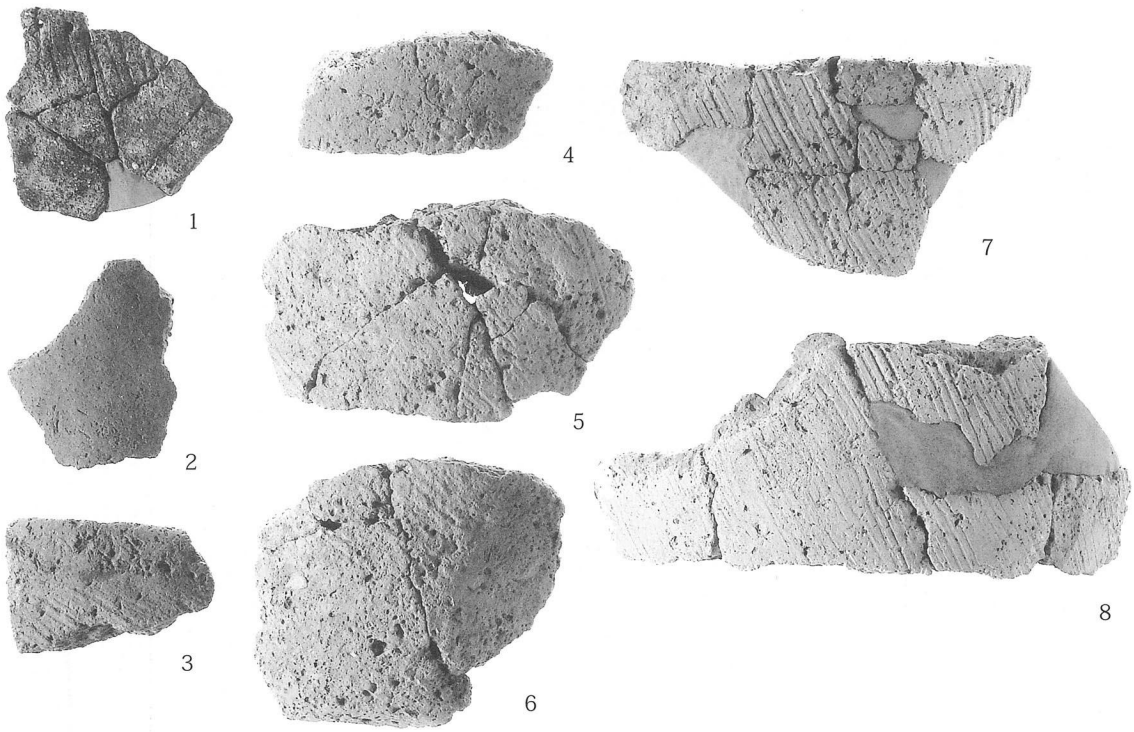
SC2 断面

SC2 完掘

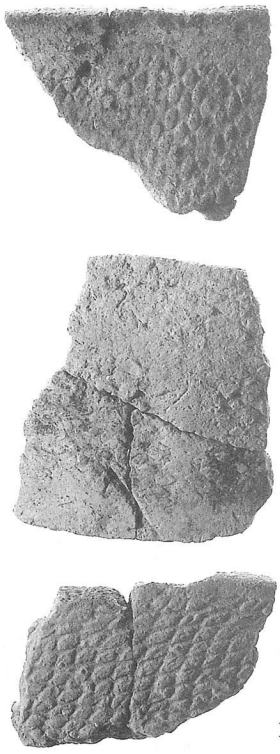
SC3 検出状況

SC3 炭化物集中箇所

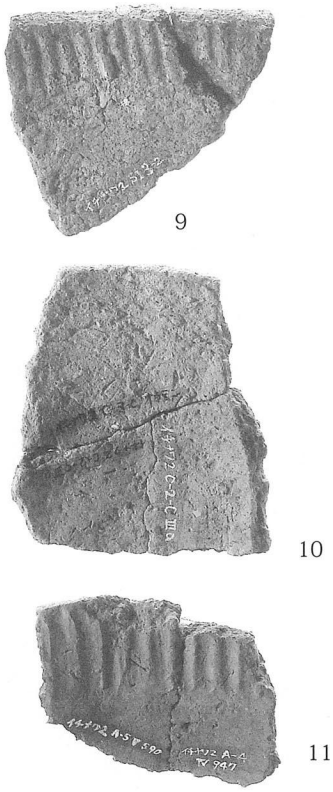
SC3 完掘



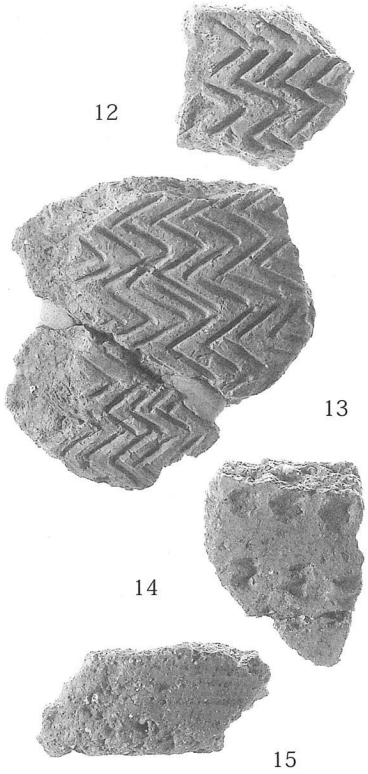
1～8



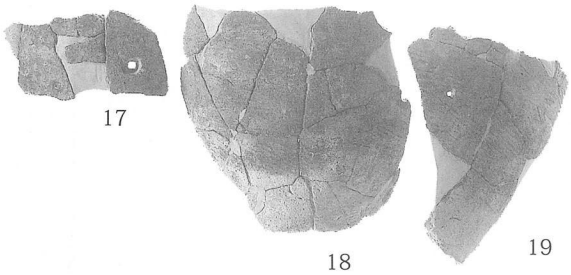
9~11（外面）



9～11（内面）



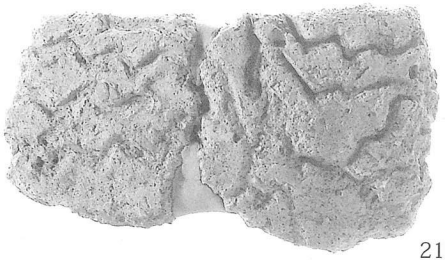
12～15



17～19

20（文様部分）

20



21

22

23

24

25

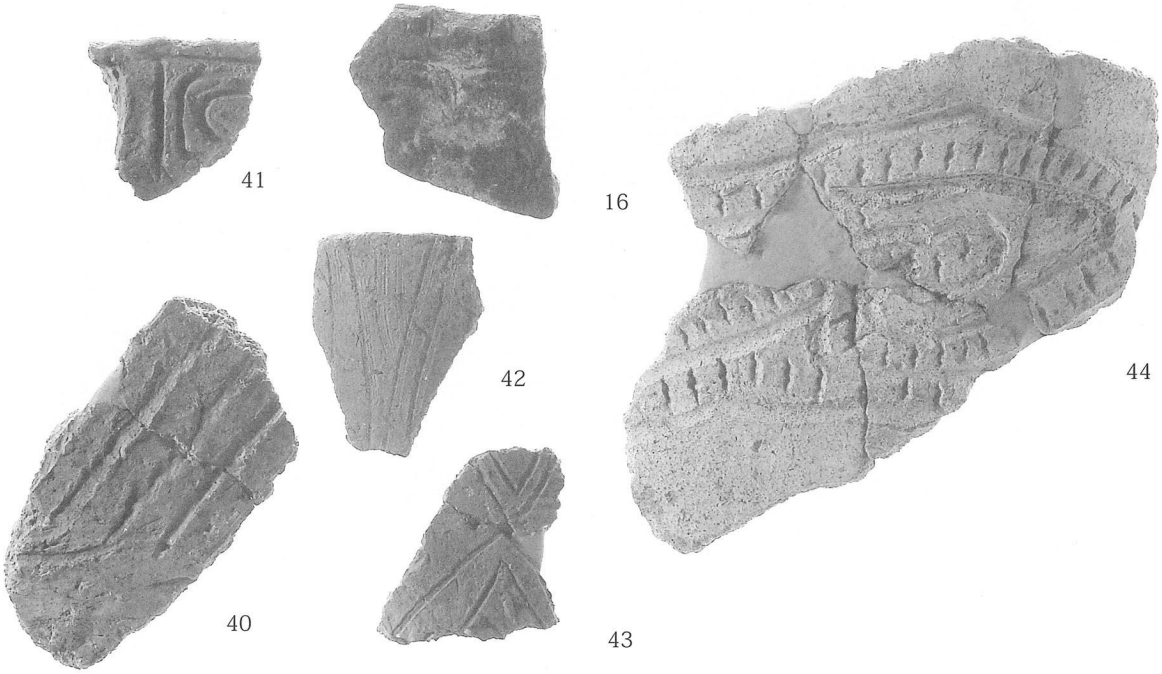
26

27

28

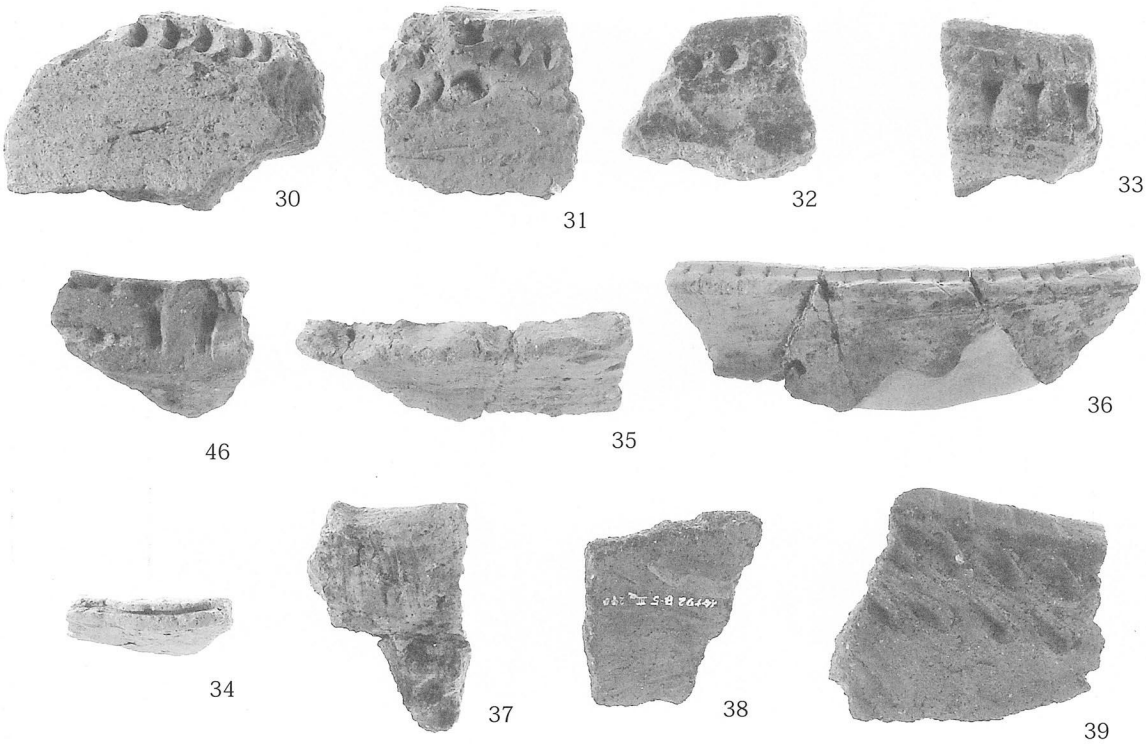
29

21～29

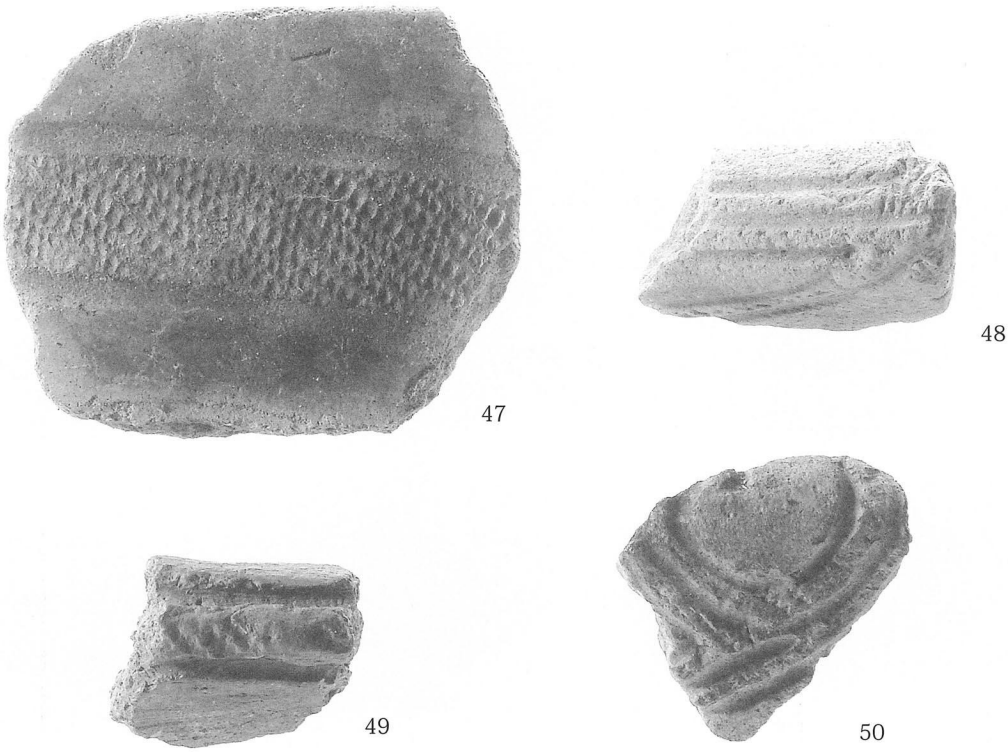


16、40、42～44

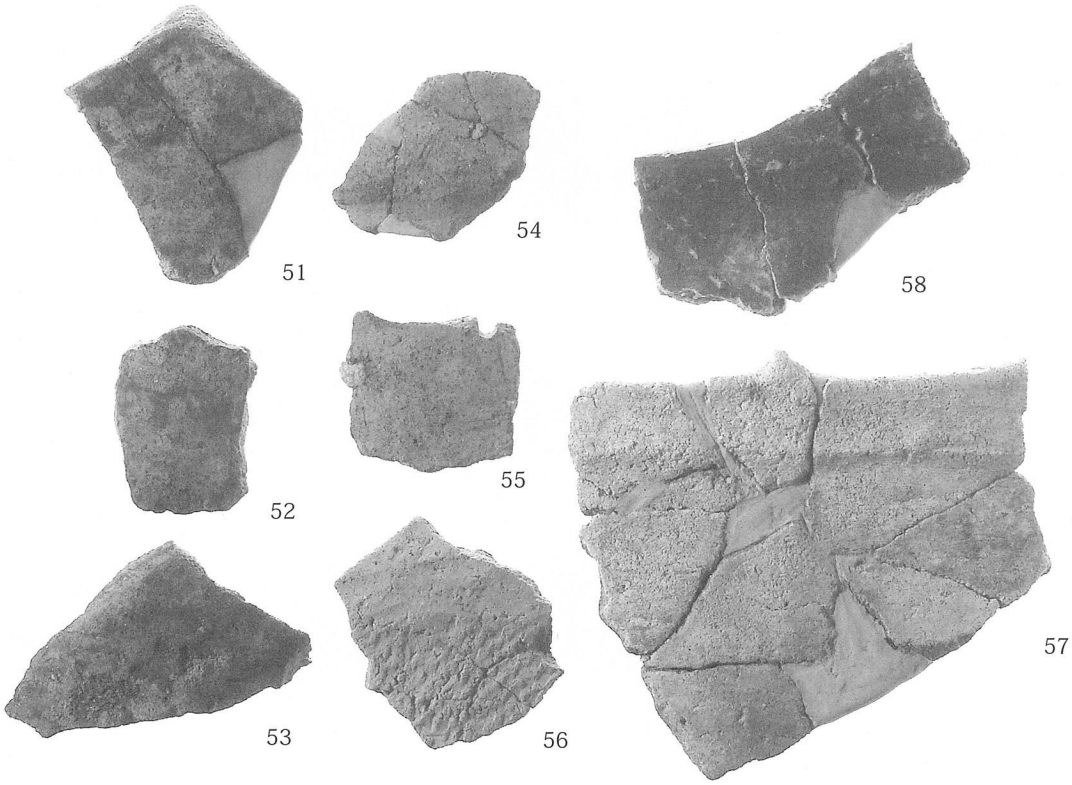
45



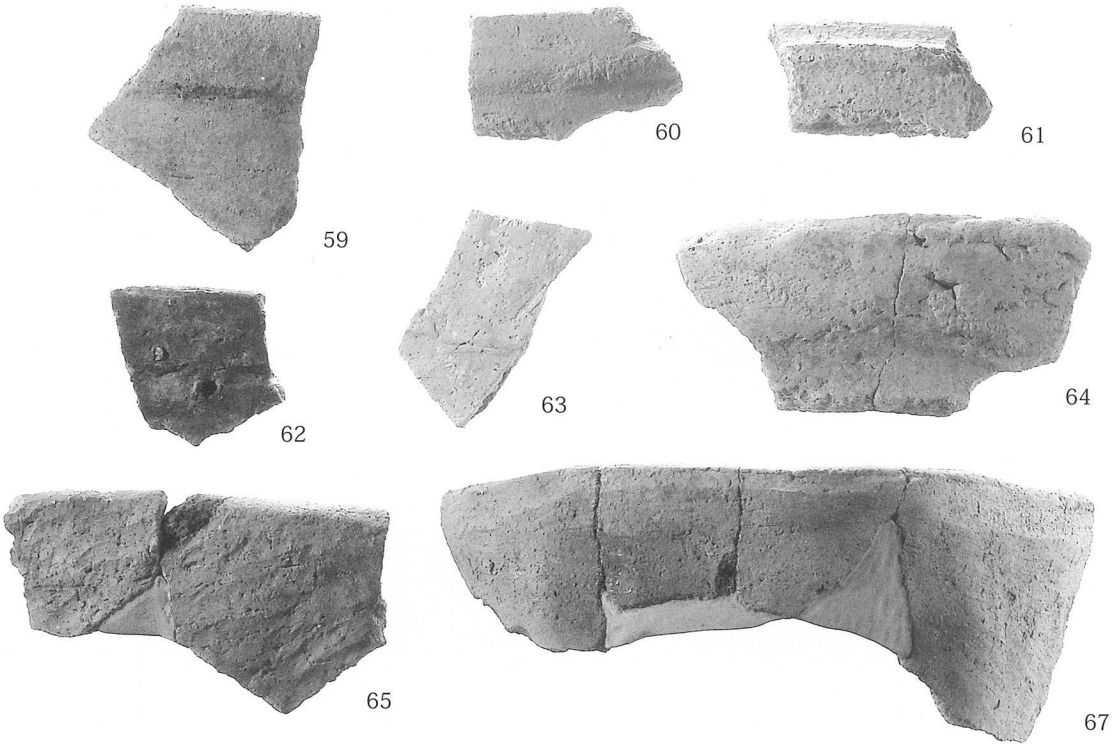
30～39、46



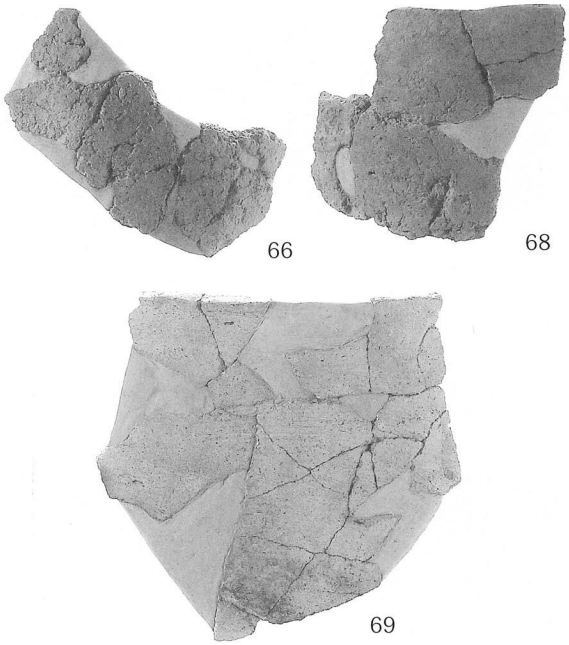
47～50



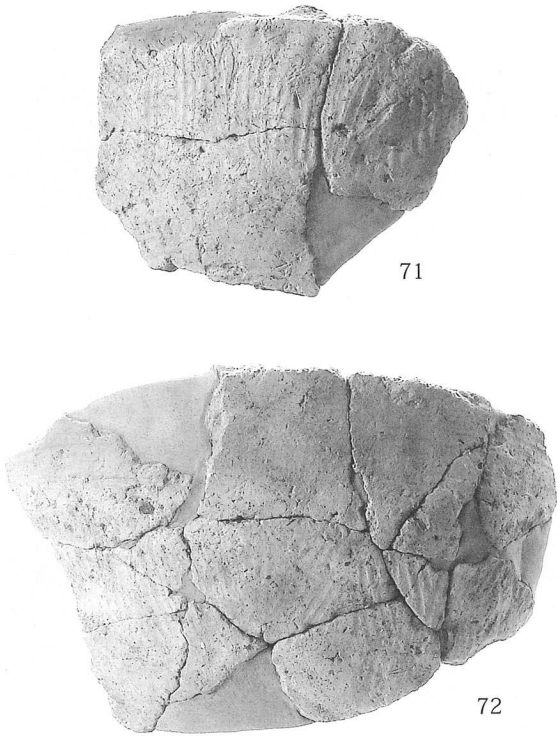
51～57



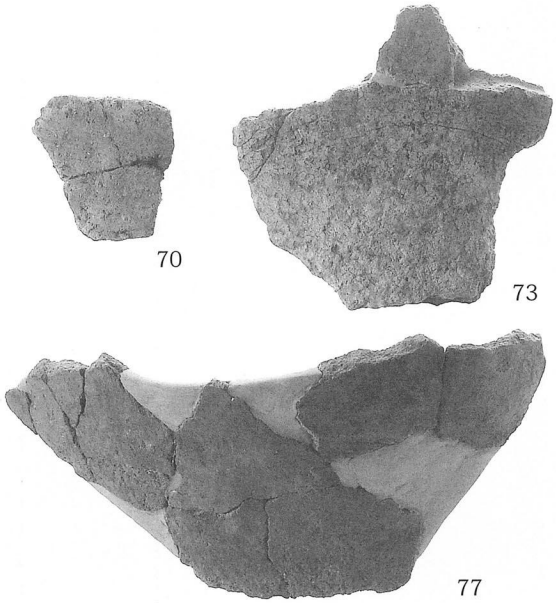
59～65、67



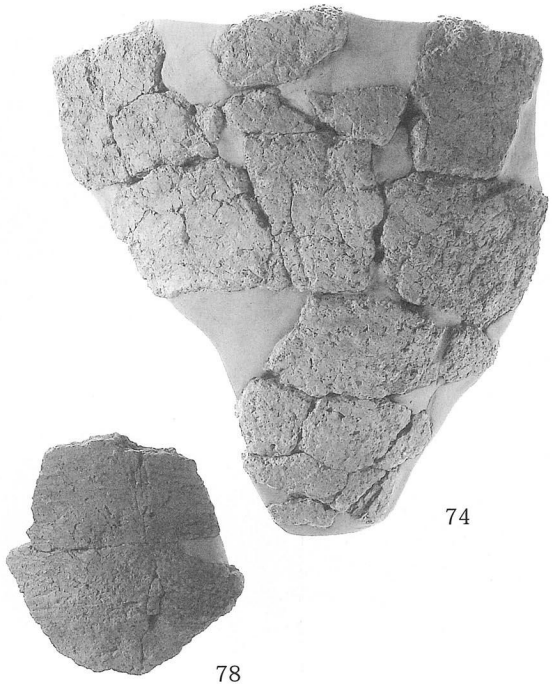
66、68、69



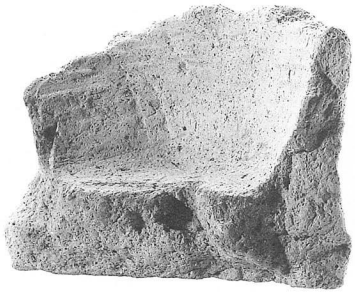
71、72



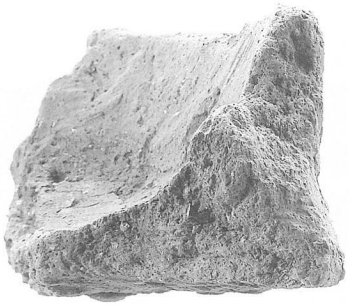
70、73、77



74、78


79 断面

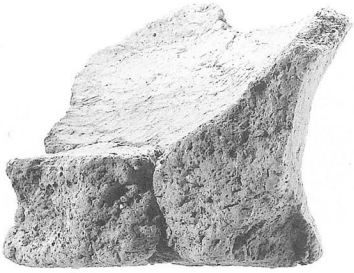
79 底面


81 断面

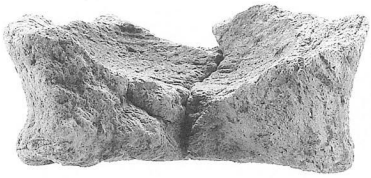
81 底面

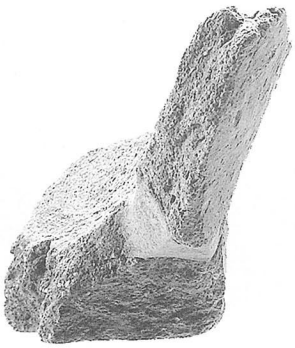
84 断面

84 底面

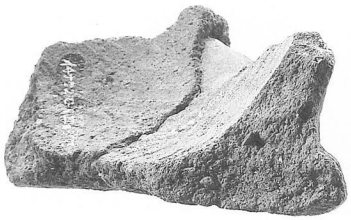

87 断面

87 底面

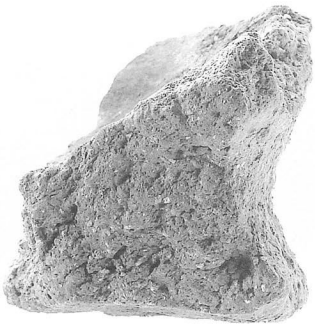

80 断面


82 断面

86 断面

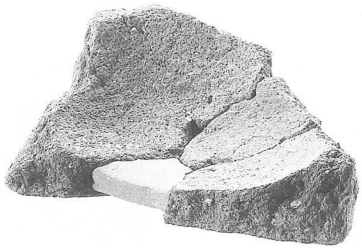

88 断面

88 底面

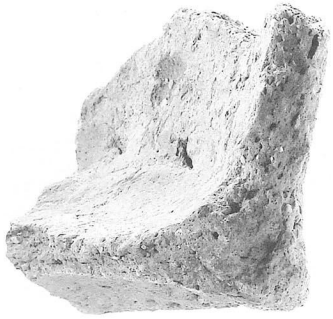

89 断面

89 底面

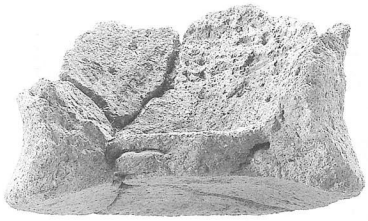
83 断面



85 断面

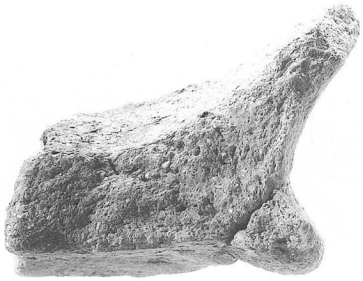


90 断面



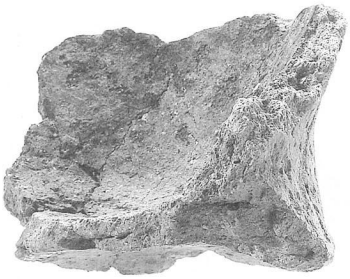
91 断面

91 底面



92 断面

92 底面

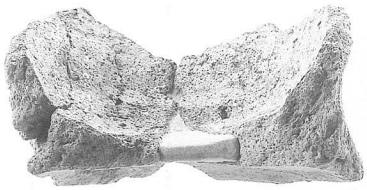


93 断面

93 底面

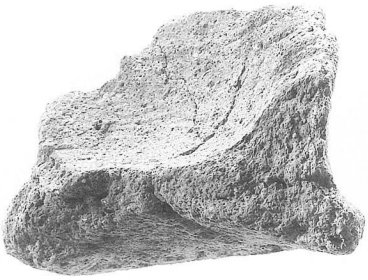
94 断面

94 底面

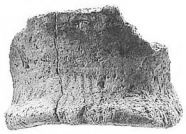


95 断面

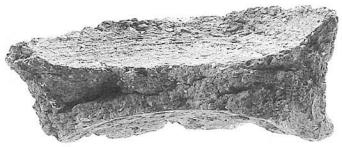
95 底面



96 断面

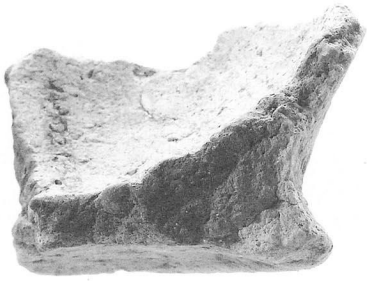


96



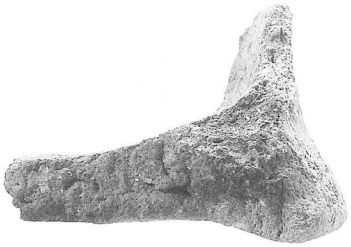
97 断面

97 底部内面



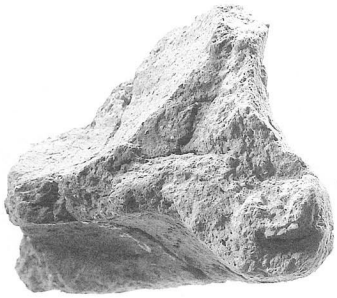
100 断面

100 底面



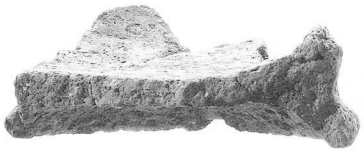
101 断面

101 底面

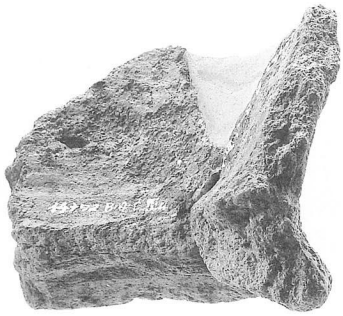


102 断面

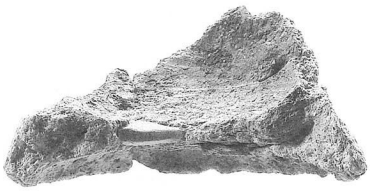
102



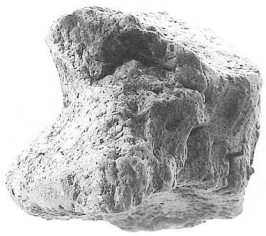
103 断面



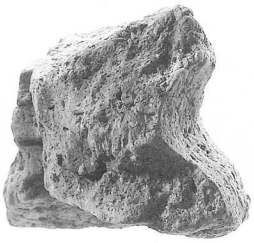
98 断面



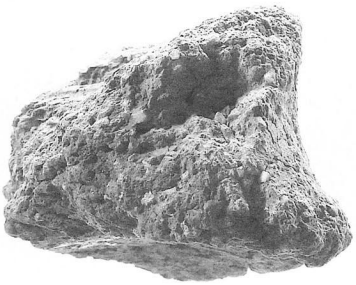
99 断面



105 断面 1

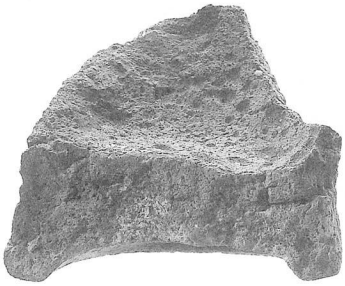


105 断面 2



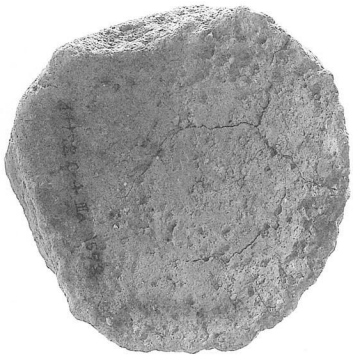
104 断面

104 底面



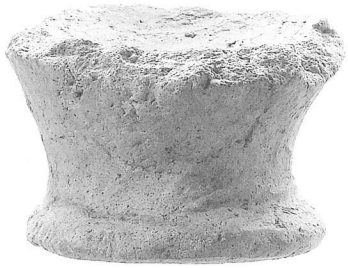
106 断面

106 底面



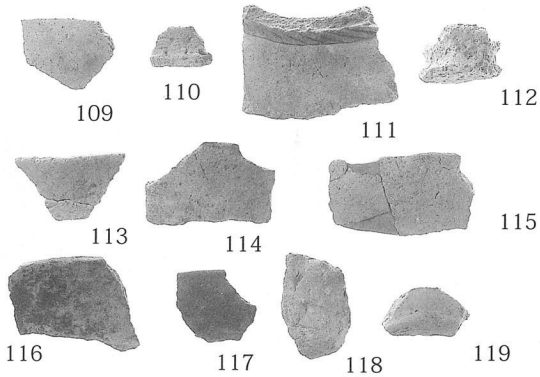
107 底面

107

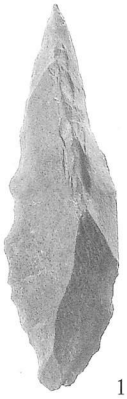


108

108 底面



109 ～ 119

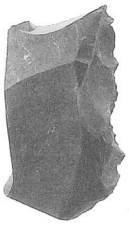


120

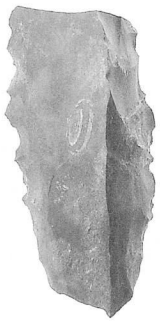
121

122

127



123

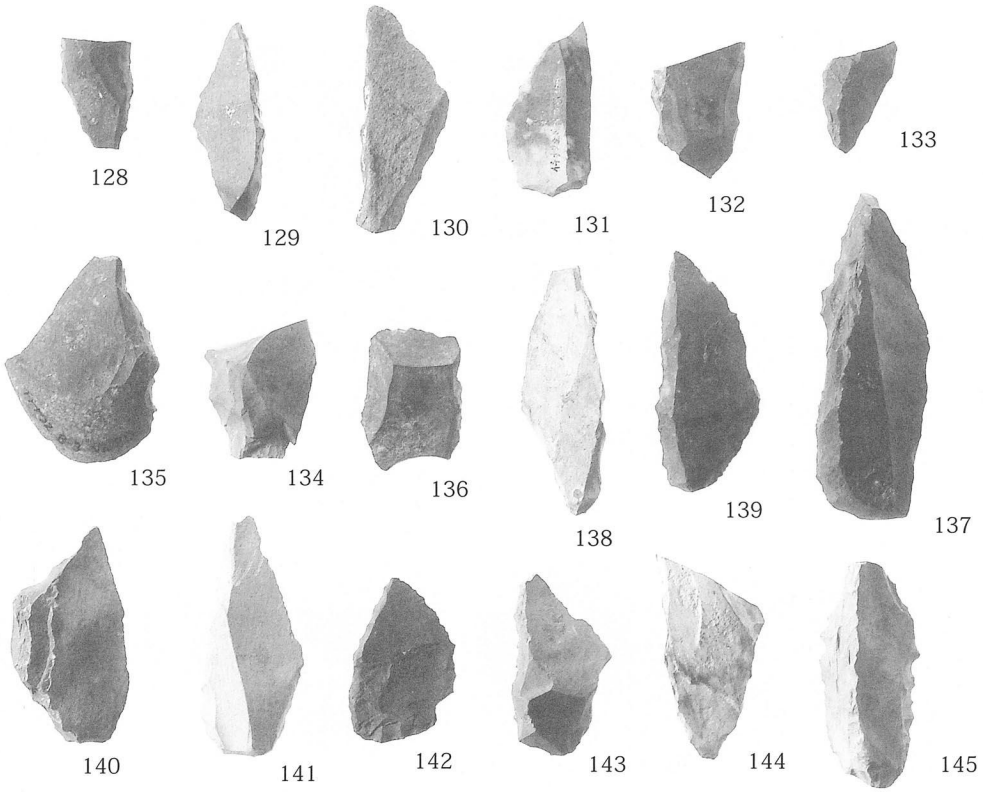


124

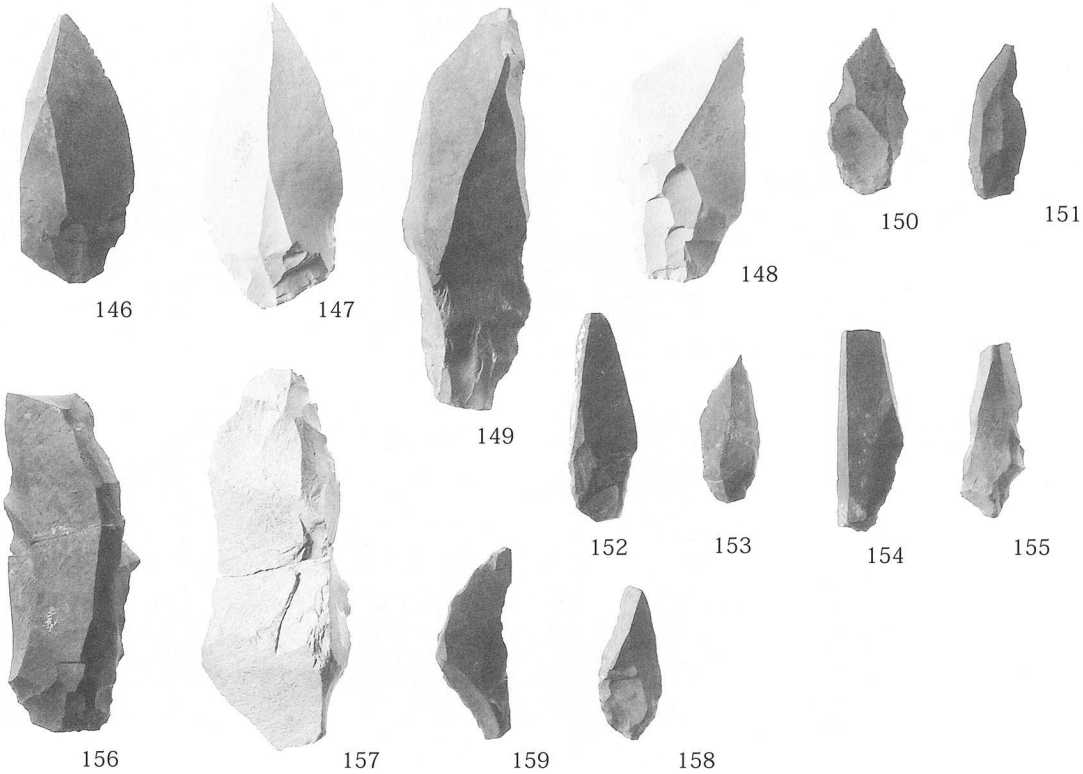
126

125

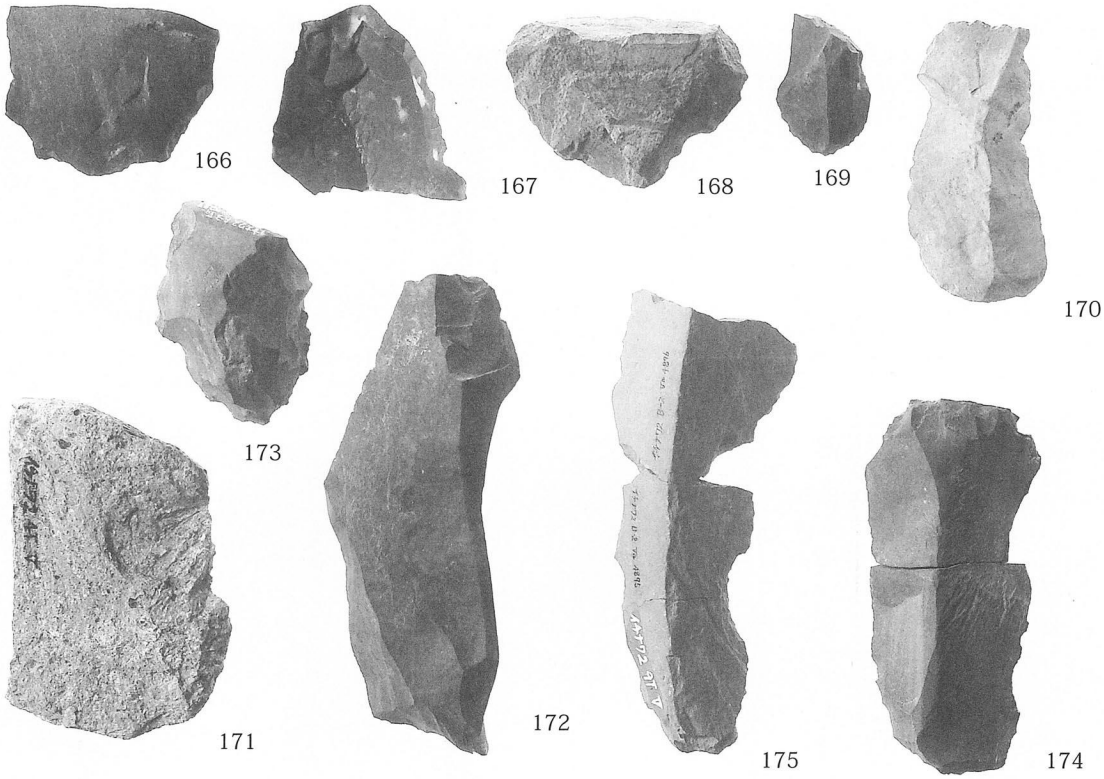
120 ～ 127



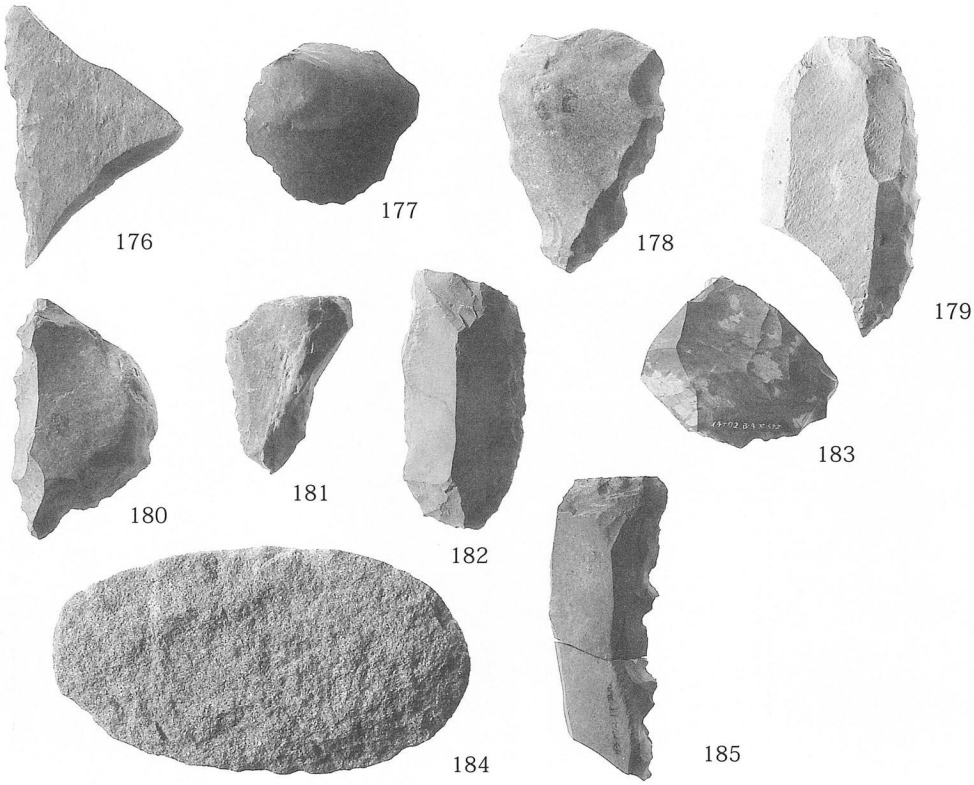
128～145



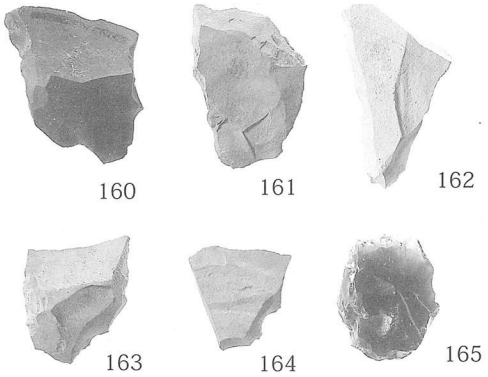
146～159



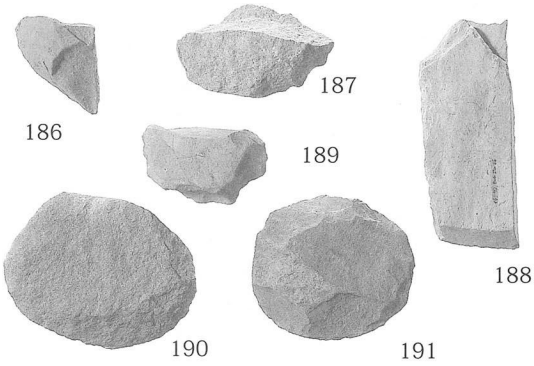
166～175



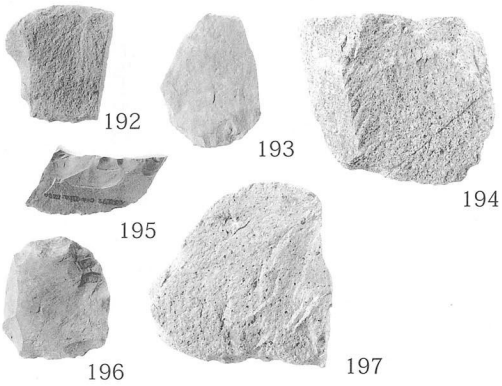
176～185



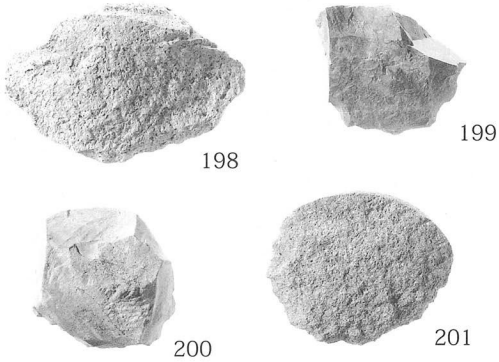
160 ～ 165



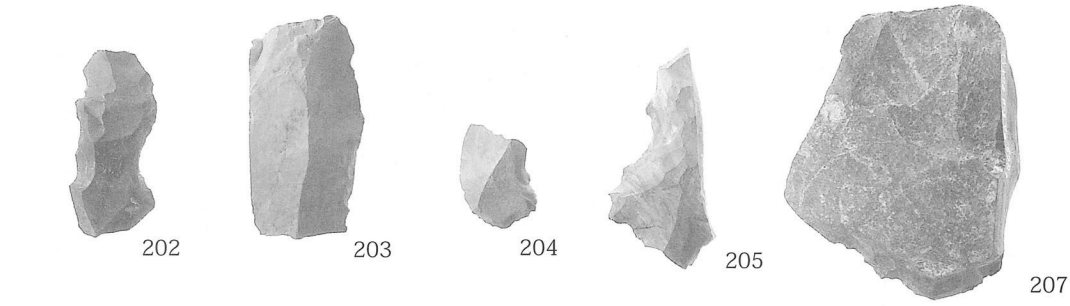
186 ～ 191

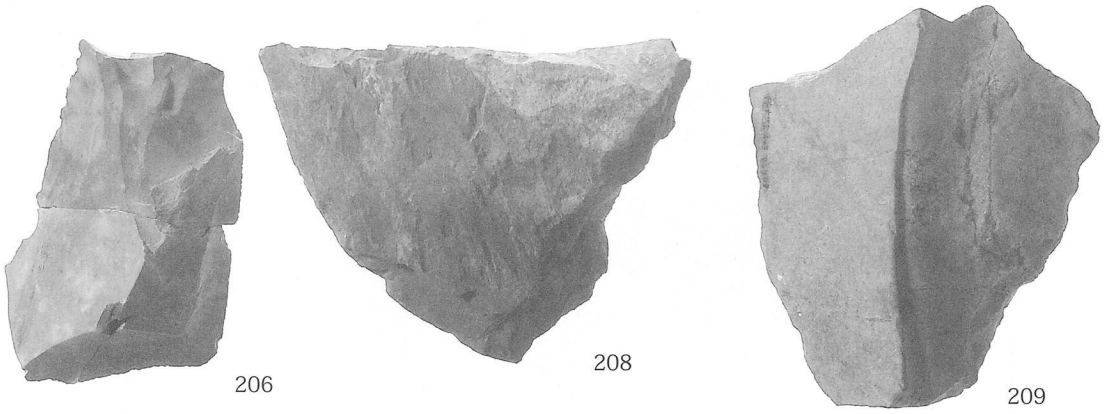


192 ～ 197

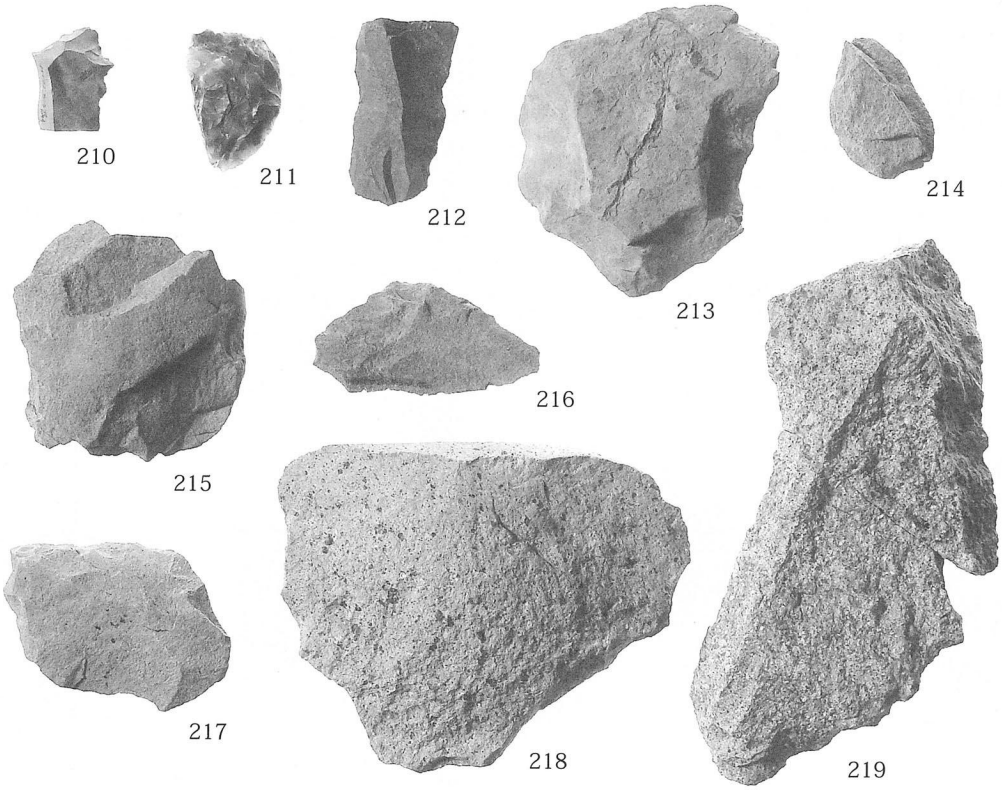


198 ～ 201

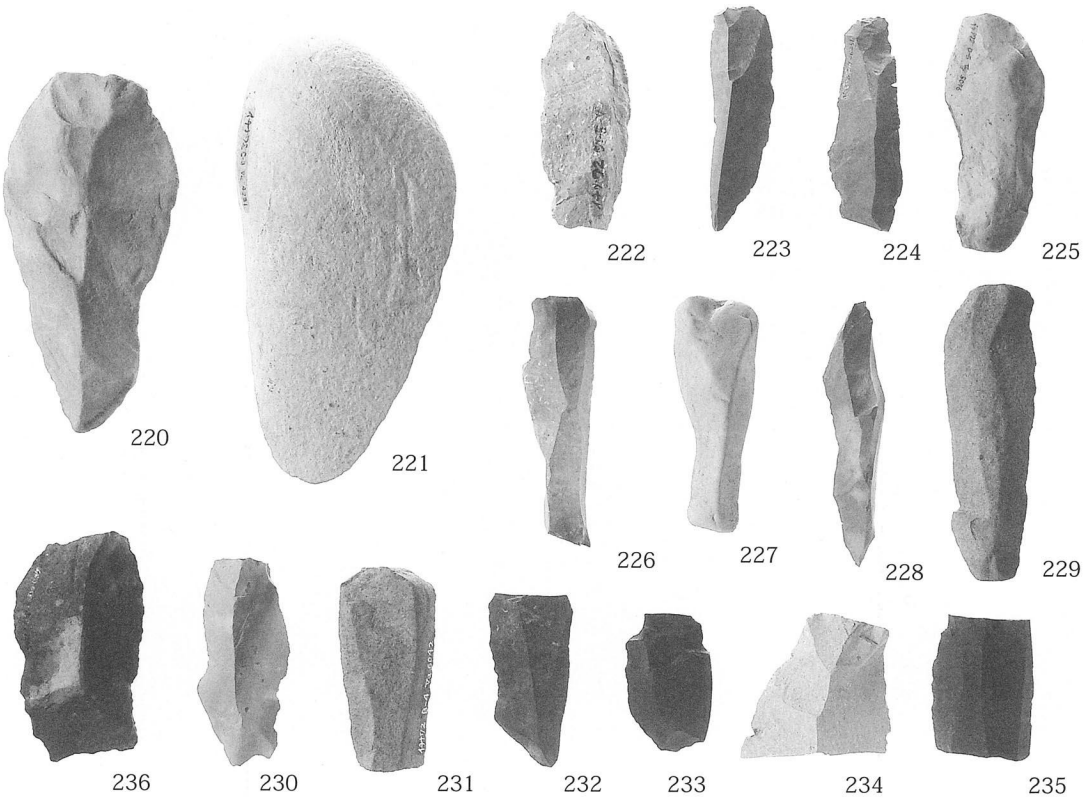




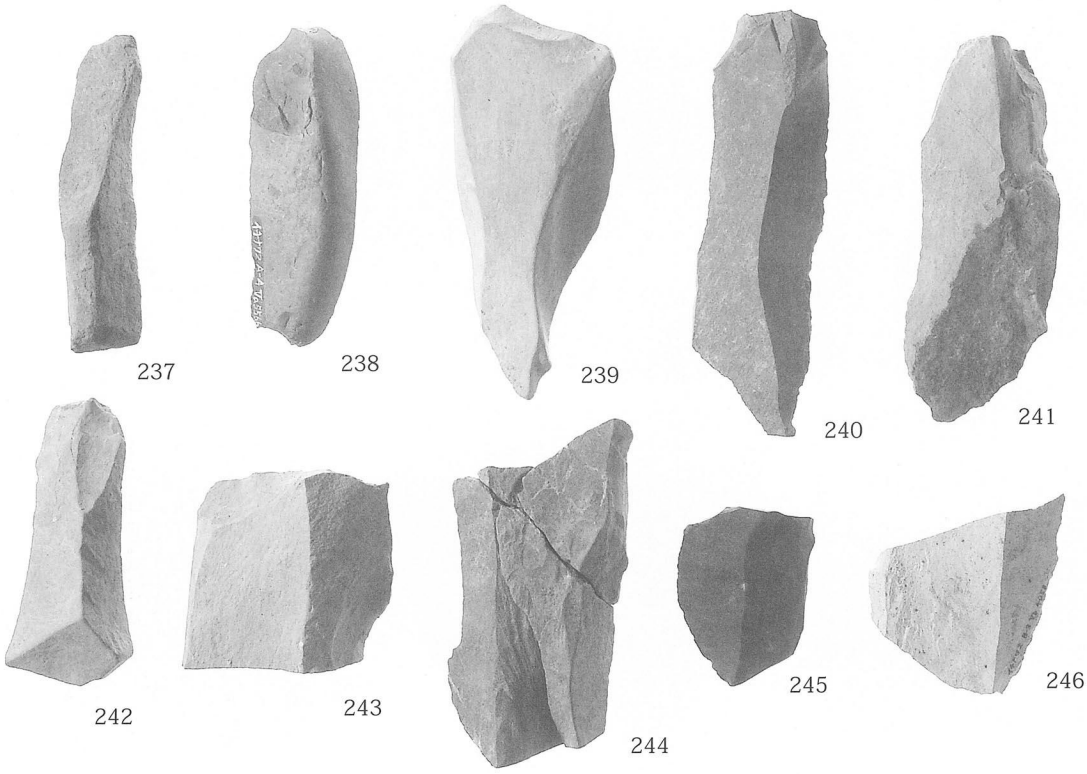
202 ～ 209



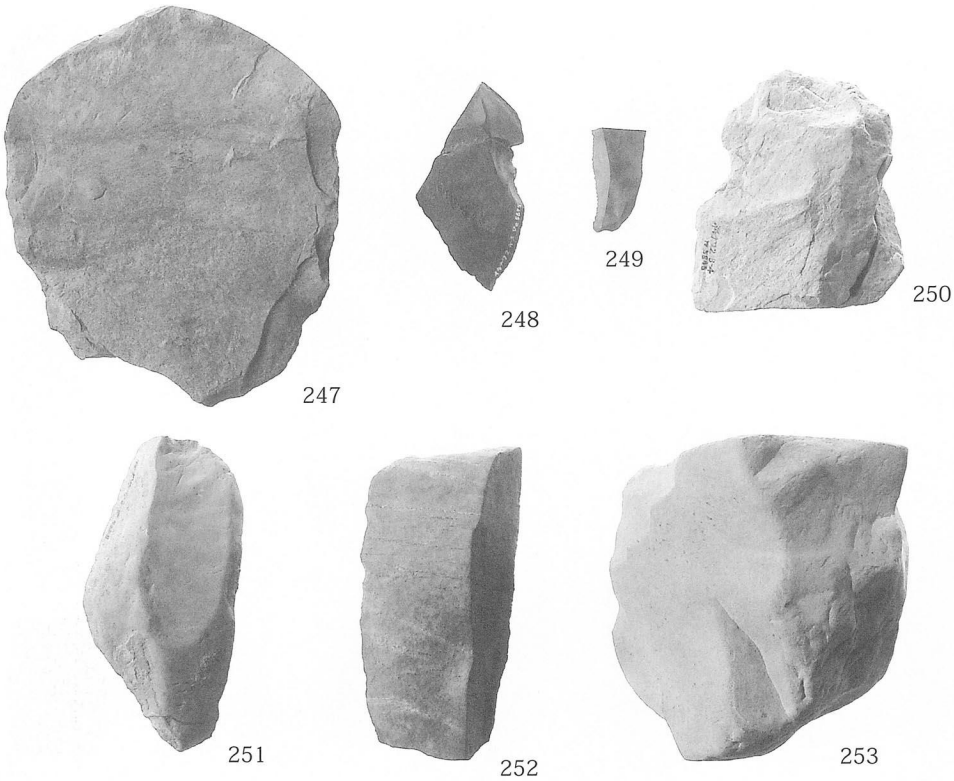
210～219



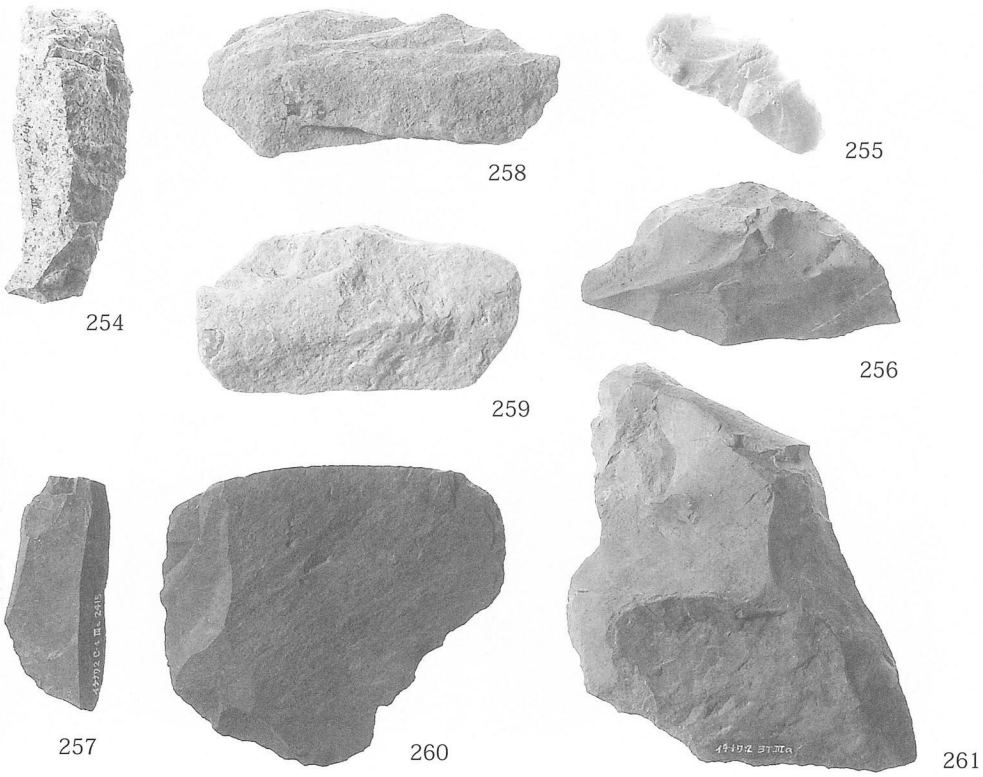
220～236



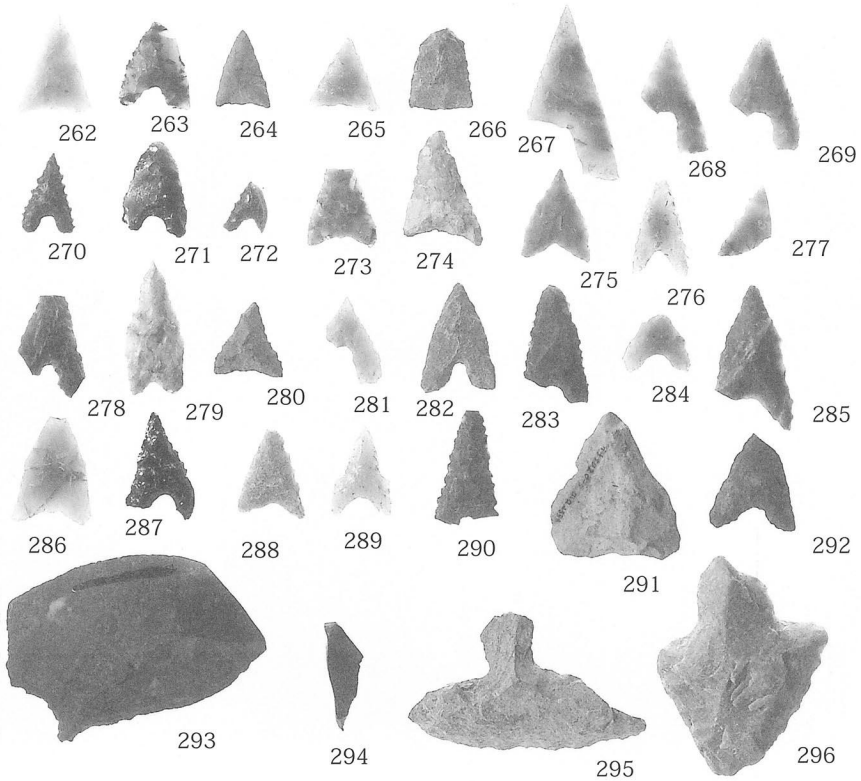
237～246



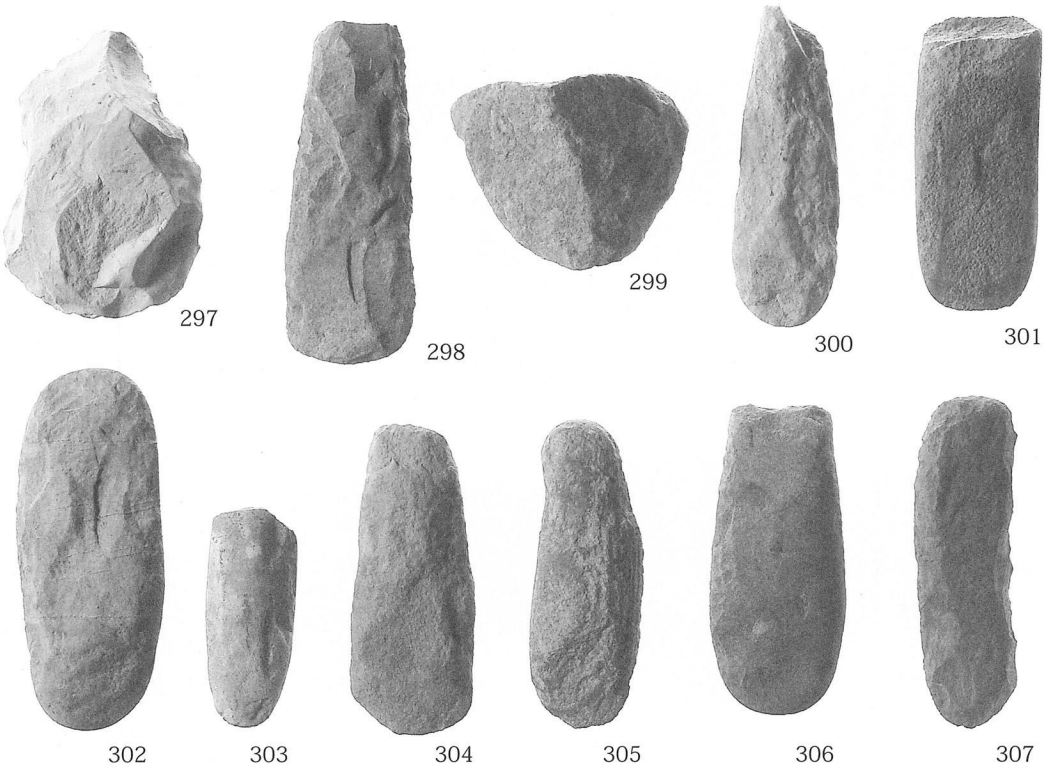
247～253



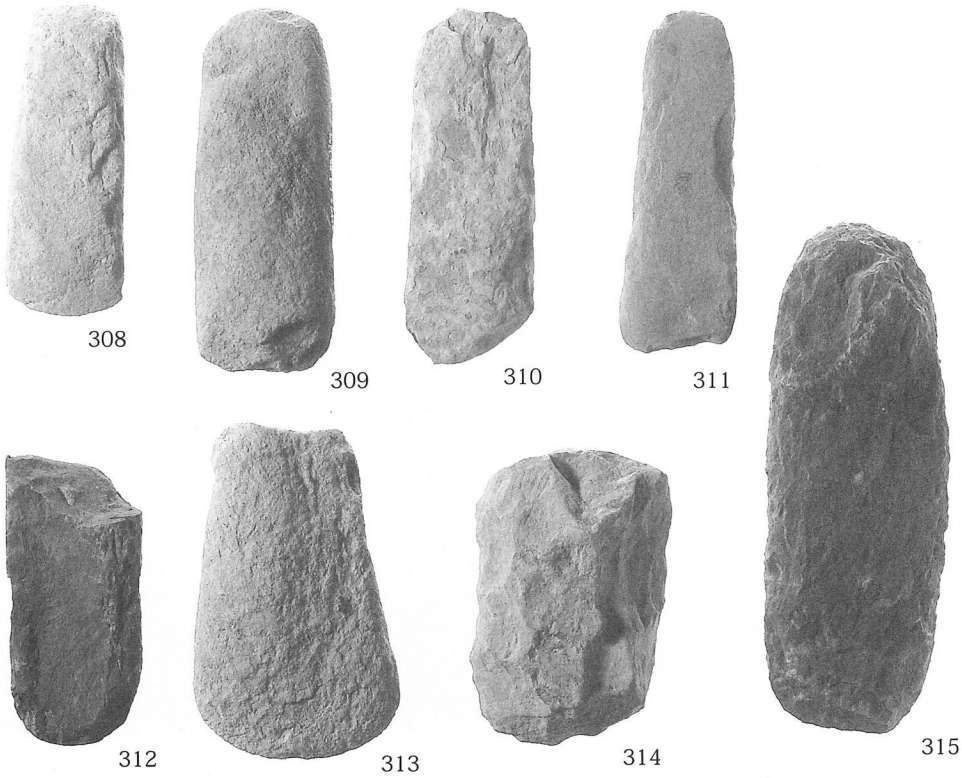
254～261



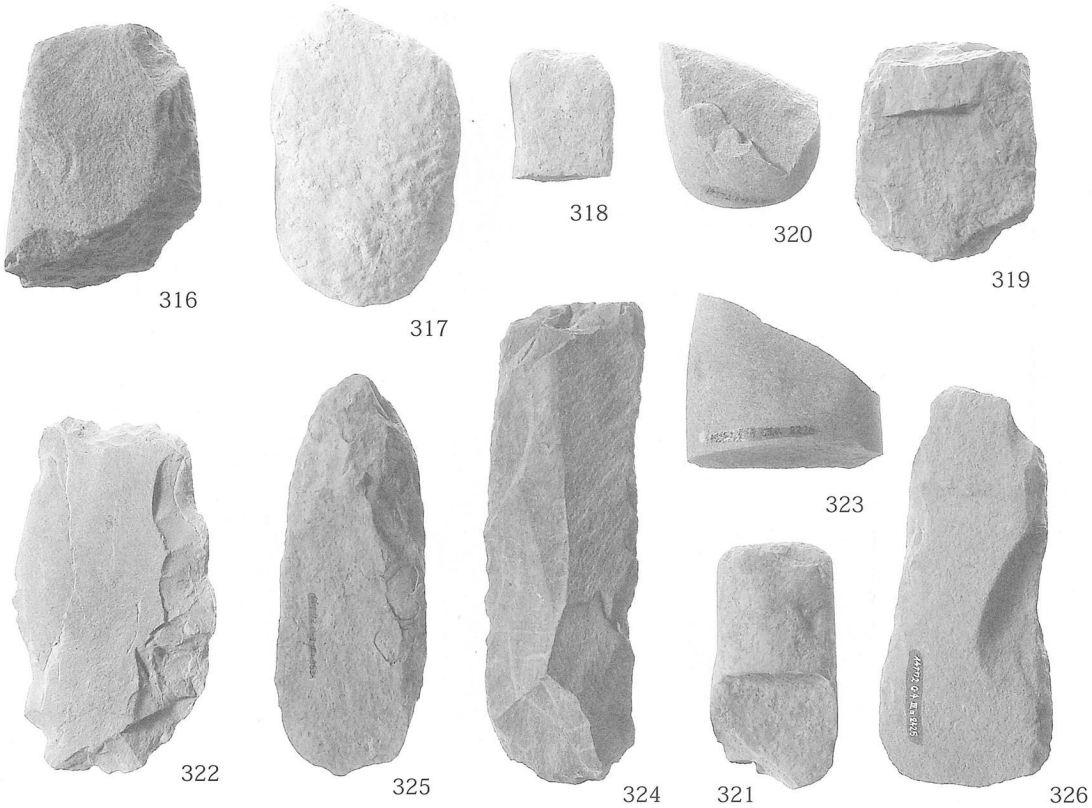
262～296



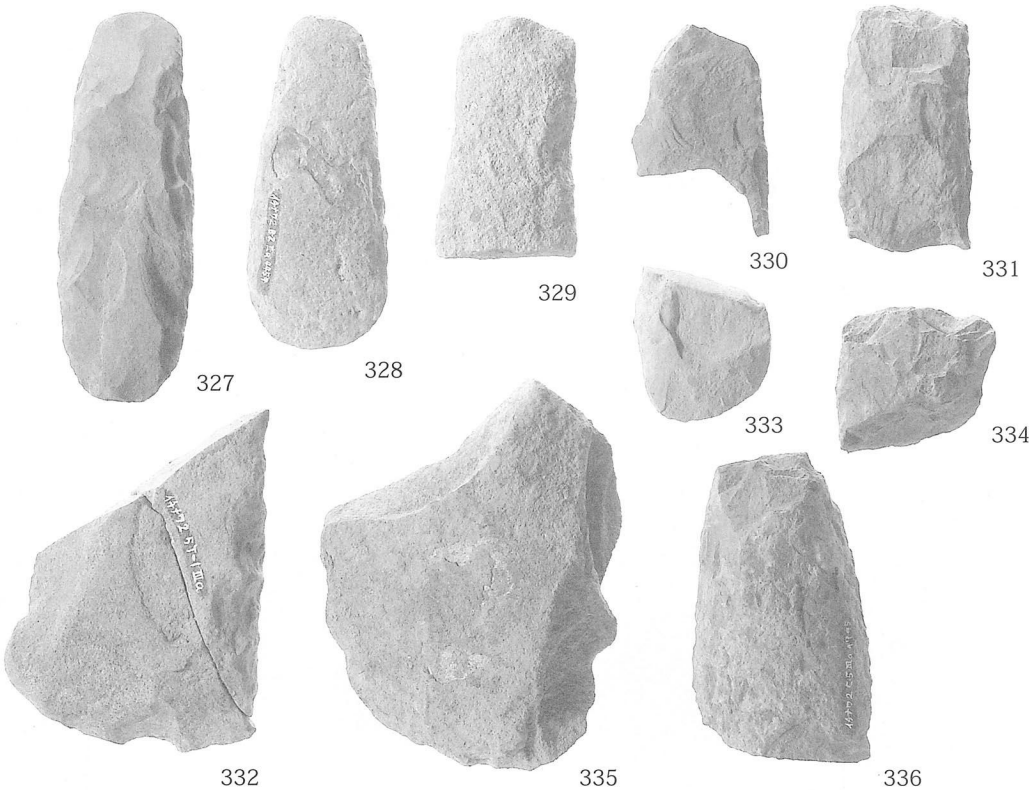
297～307



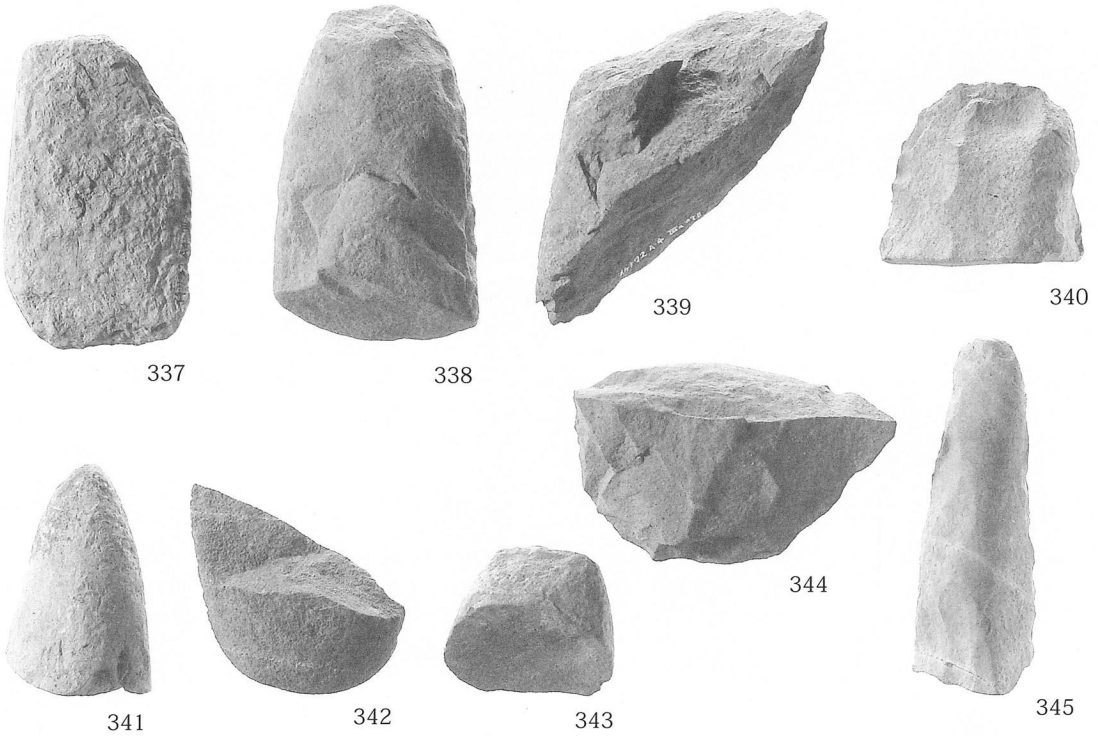
308～315



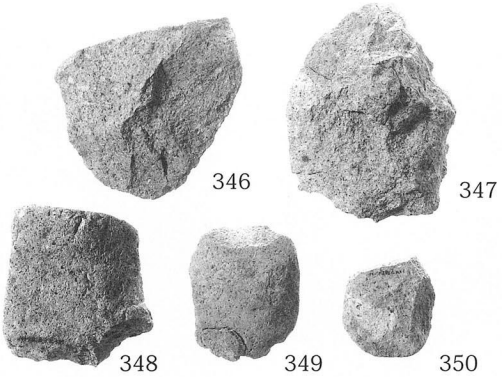
316 ～ 326



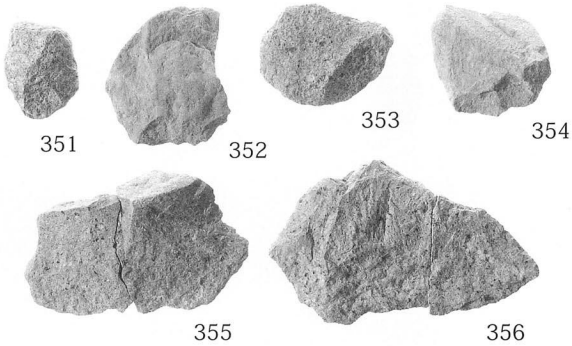
327 ～ 336



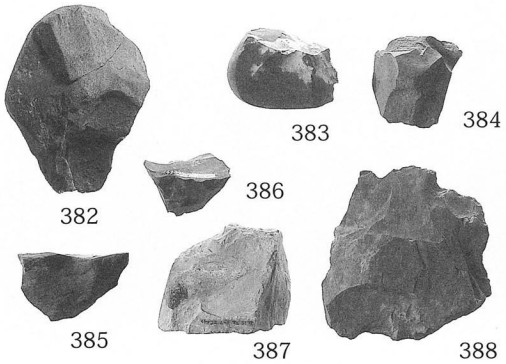
337～345



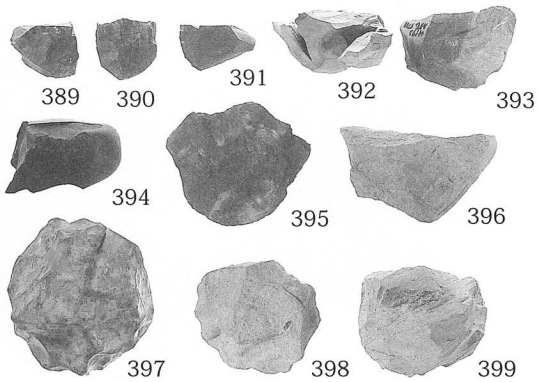
346～350



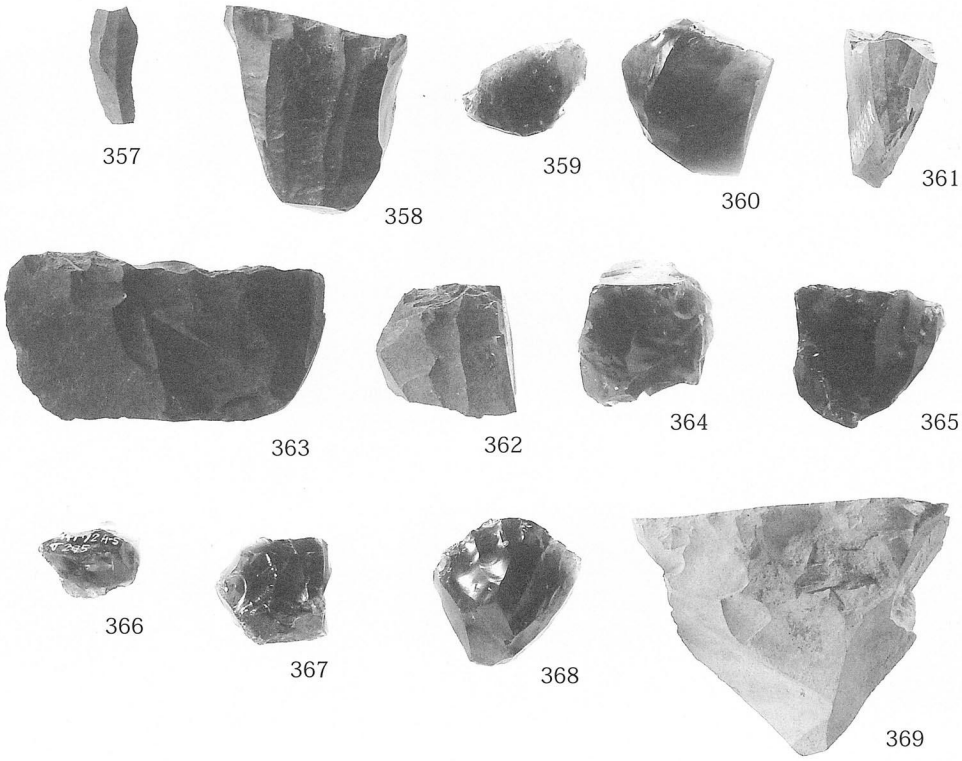
351～356



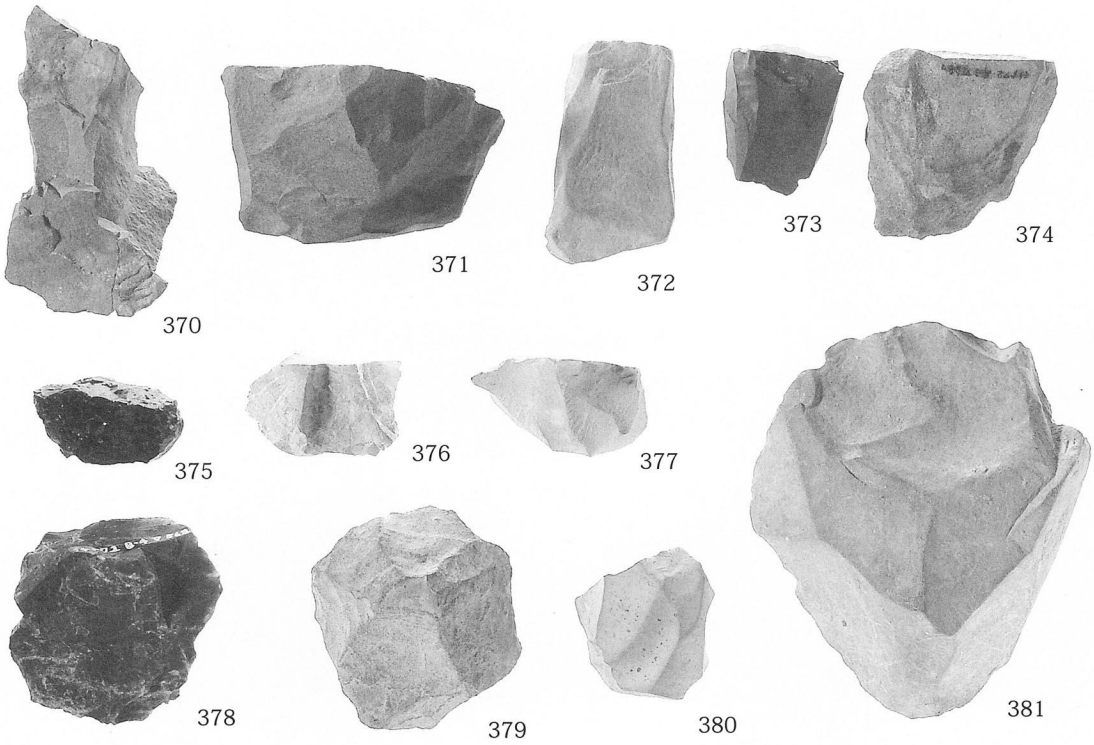
382～388



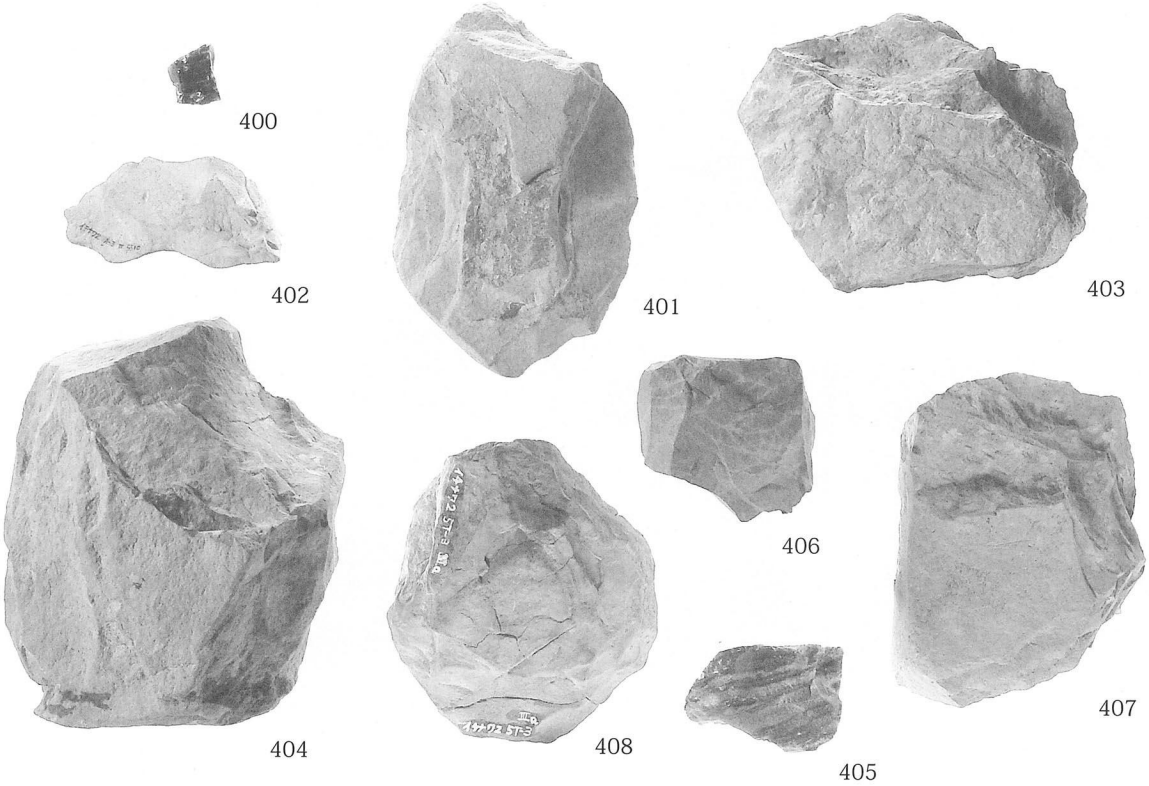
389～399



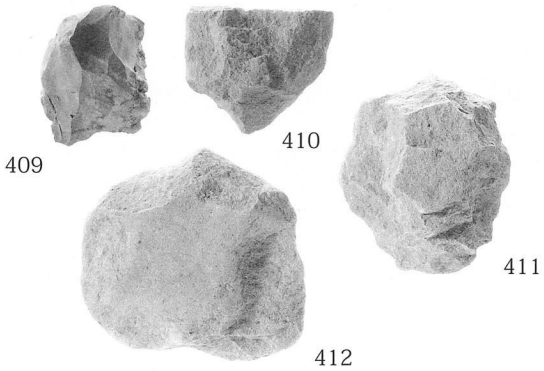
357～369



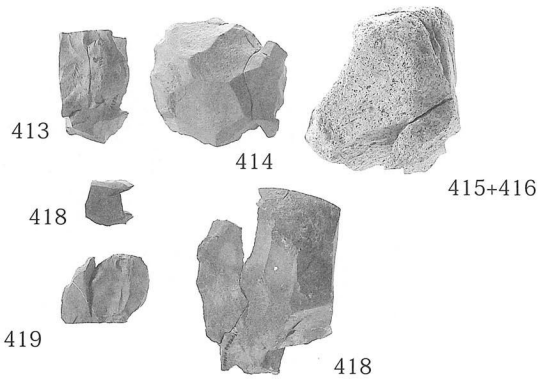
370～381



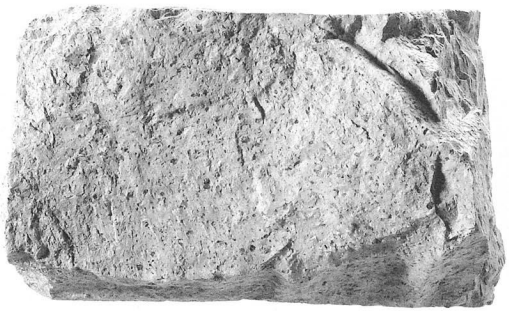
400 ～ 408



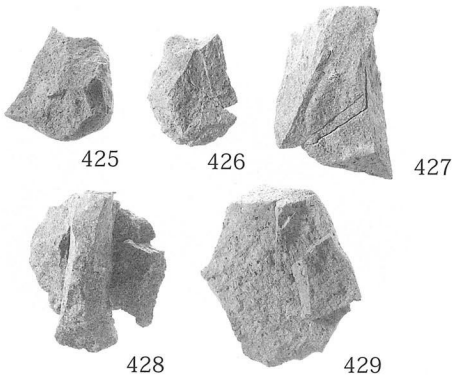
409 ～ 412



413 ～ 419

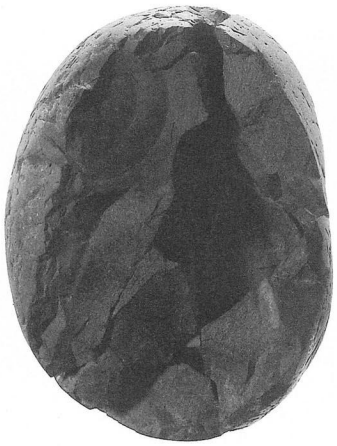


423



425 ～ 429

420+421+422

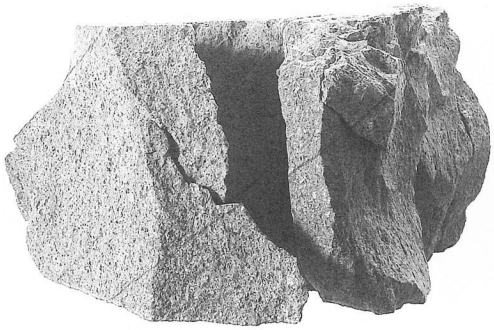


421+422

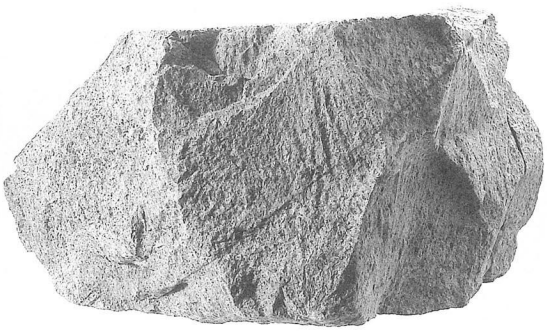
422

424（接合後）

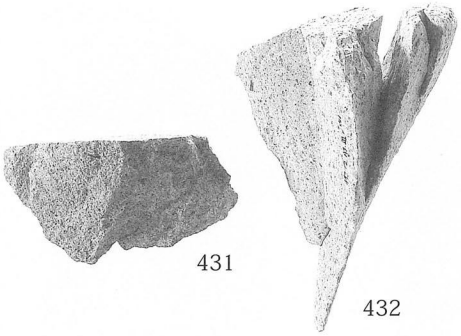
424（接合前）



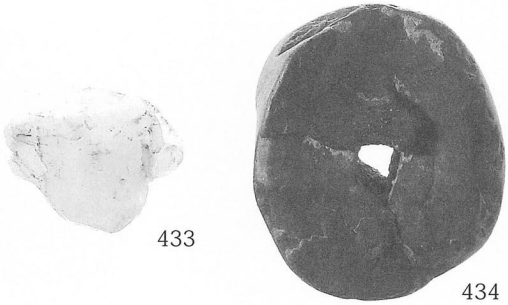
430（接合後）



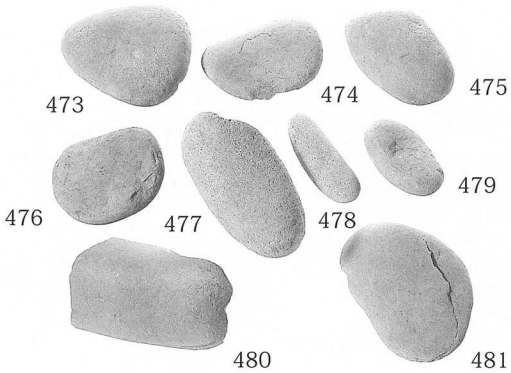
430（接合前）



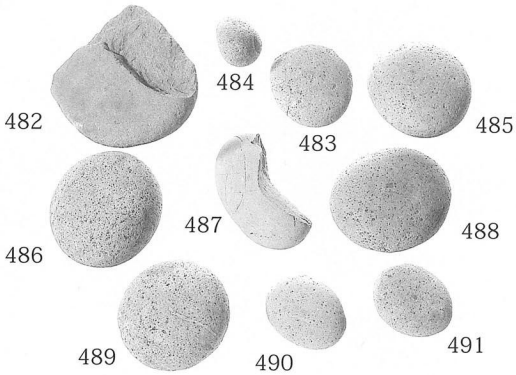
431、432



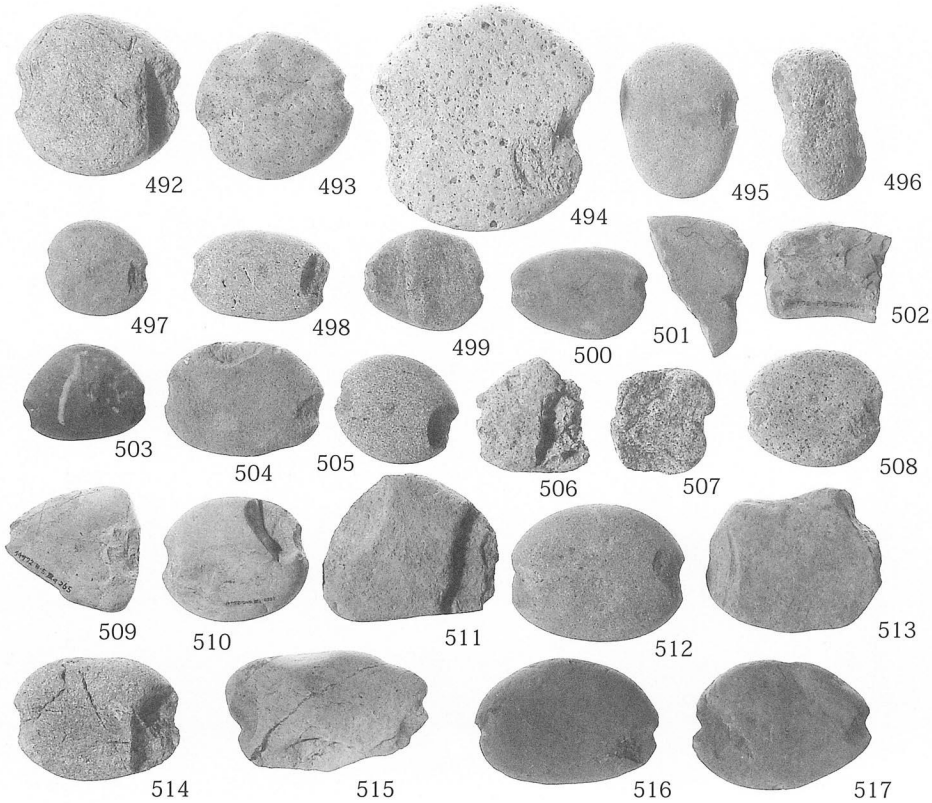
433、434



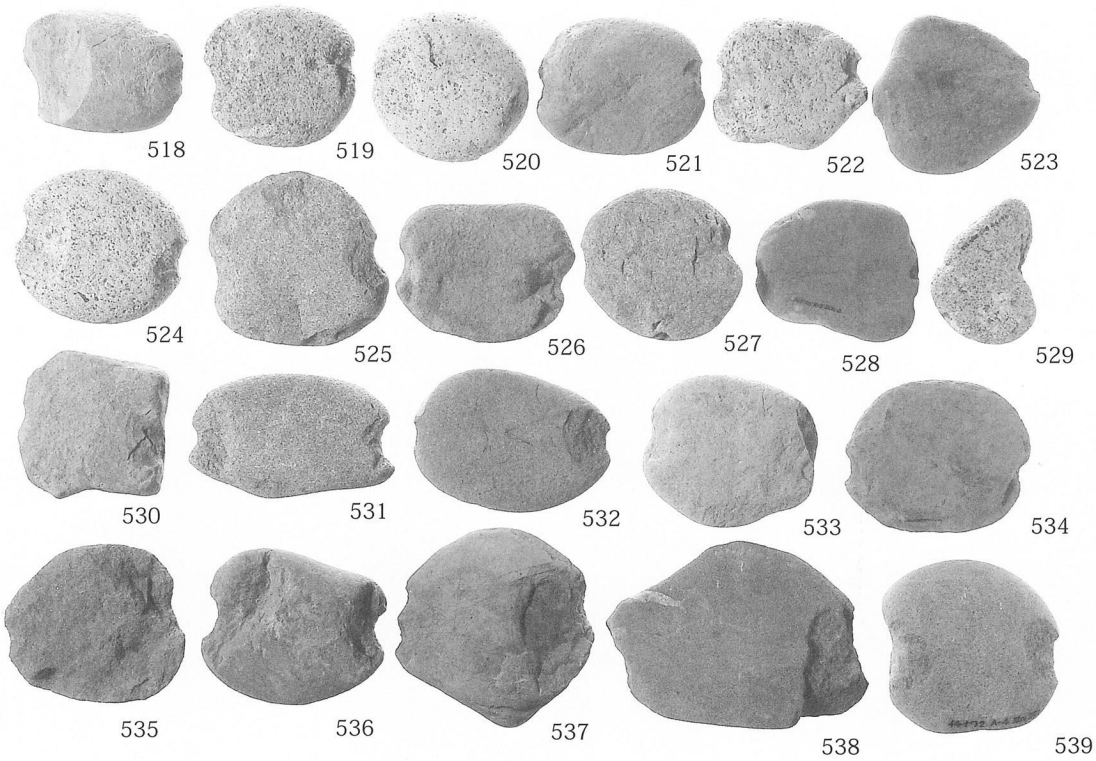
473 ～ 481



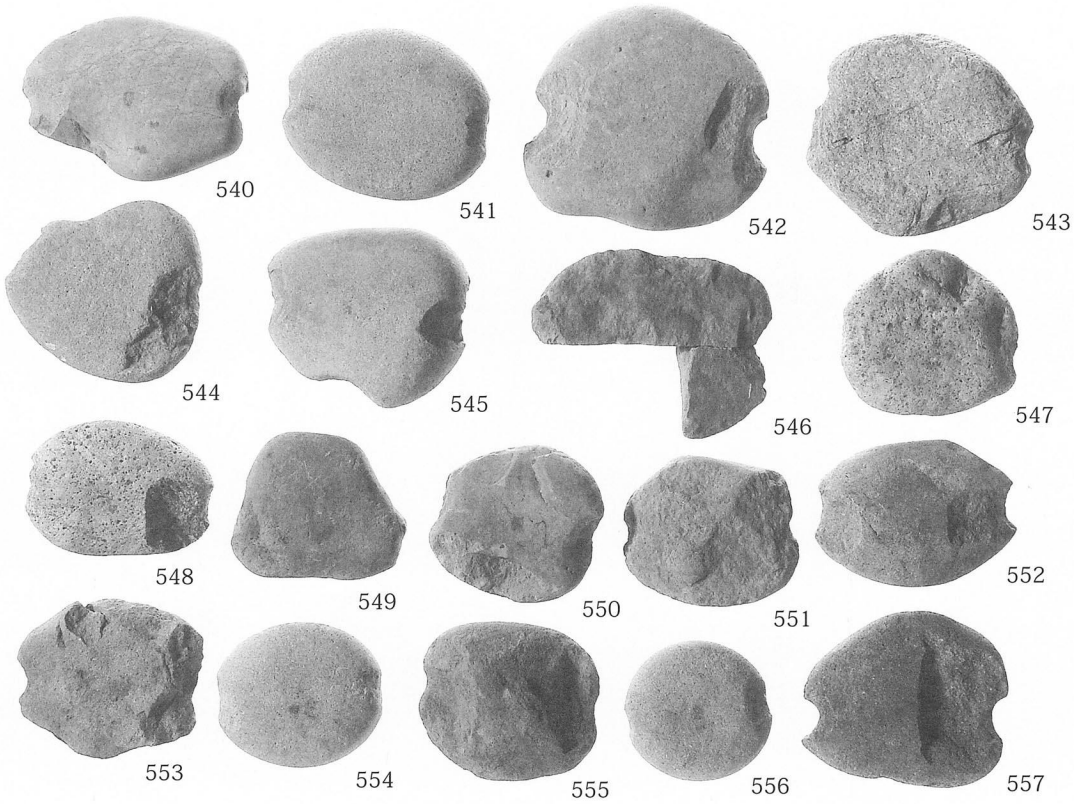
482 ～ 491



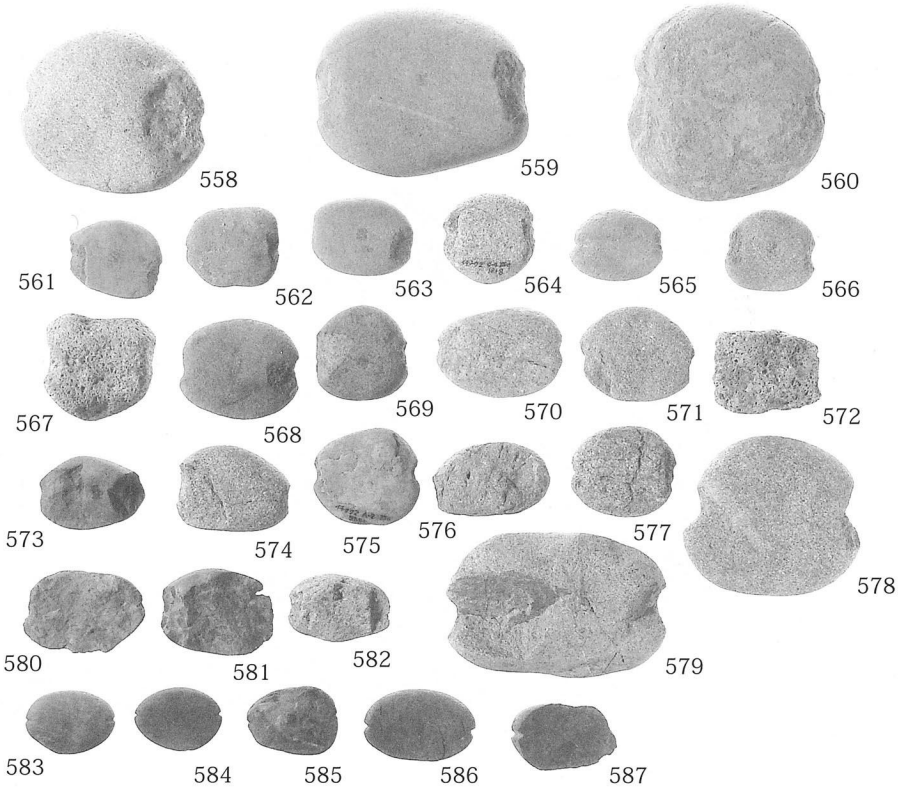
492 ～ 517



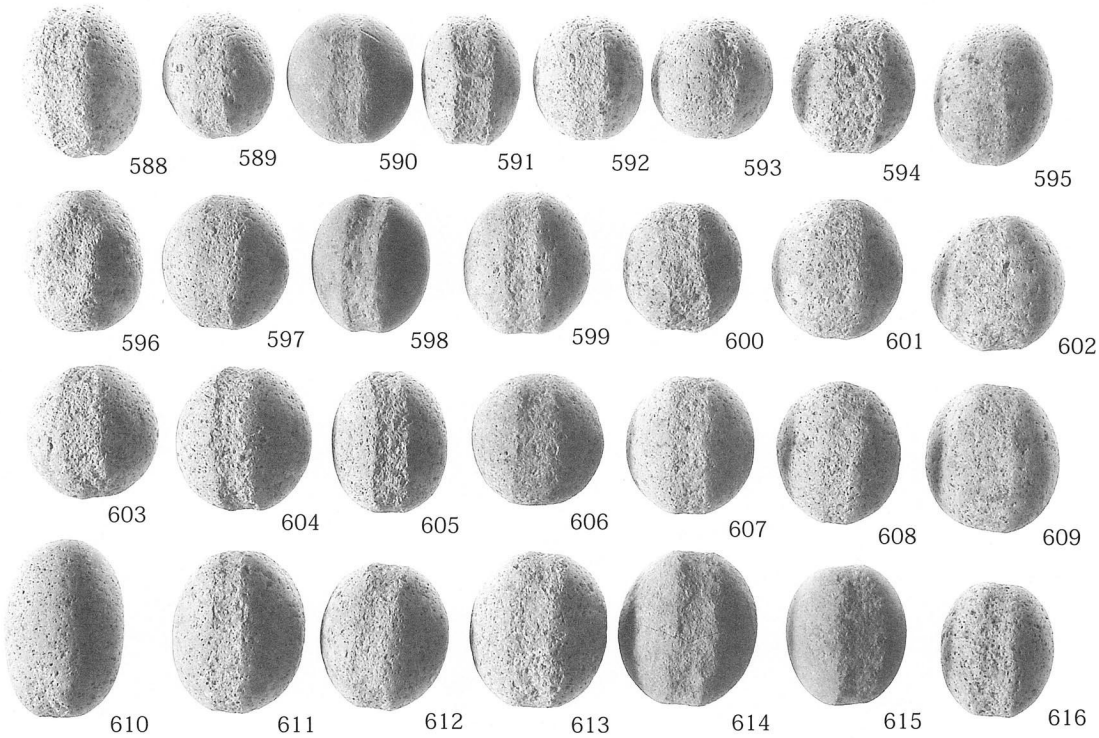
518～539



540～557



558 ～ 587



588 ～ 616

報告書抄録

ふりがな	いちなわかみだいにいせき
書　名	市納上第２遺跡
副書名	東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 58
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第 170 集
執筆・編集担当者名	立神勇志　岡田　諭
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212　宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
発行年月日	2008 年３月７日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いちなわかみだいにいせき 市納上第2遺跡	みやざきけん 宮崎県 こゆぐん 児湯郡 かわみなみ 川南町 おおあざかわみなみ 大字川南 あざいちなわかみ 字市納上	45401		32° 05′ 29″	131° 25′ 49″	2005. 7. 1 ～ 2005.12.27	2,190㎡	東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う発掘調査

種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物
集落遺跡	旧石器時代	礫群３基	角錐状石器、剥片尖頭器、ナイフ形石器、台形石器、剥片、スクレイパー、礫器、細石刃核、細石刃、石核、接合資料
	縄文時代	集石遺構 32 基（早期）	早期：大原Ｂ式併行期土器、貝殻条痕文土器、押型文土器 前・中期：轟式周辺土器、大平式 後・晩期：市来式、綾式、沈線文、磨消縄文、黒川式、太郎迫式周辺土器、孔列文土器、粗製深鉢、石鏃、石匙、石斧、尾鈴山酸性岩類製剥片、石錘（打欠・切目・有溝）
	弥生～古墳時代		弥生土器、土師器
	中世～	土坑２基（炭焼き跡か） 溝状遺構２条	土師器皿

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 170 集

市納上第２遺跡

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 58

2008　年３月７日

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒 880-0212　宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
TEL　0985-36-1171　FAX　0985-72-0660

印　刷　藤屋印刷株式会社
〒 883-0045　日向市本町 7-5
TEL　0982-52-7171　FAX　0982-56-1208